掲載記事の無断転載転写を禁じます

平成30年12月20日発行

鵠沼

久久比奴末

はまゆうと桜貝と
海光るわが故里

第　１１７　号

特集≪歴史講座≫
「江戸時代鵠沼村の弘法大師信仰」……圭室　文雄 …1

事業報告
公民館まつり「鵠沼を語る会」展示……公民館まつり展示チーム…32

Coffee Break……34

≪作家春秋≫ ②
清水三十六(山本周五郎)と井口長治(山手樹一郎)
腰を抜かしていた亀井勝一郎……森岡　澄……36

≪今井達夫 落穂ひろい≫ ②
鵠沼と三田派……今井　達夫…38

『鵠沼を巡る千一話』より
新田開発……渡部　瞭……43

活動の記録(平成30年６月～12月) ……49

編集後記 …… 52

『新編相模国風土記稿』（天保12年、1841)に、「鵠沼村久久比奴末牟良」
とあり、当時は“くぐいぬま”と呼んでいたことが分かる。

鵠沼を語る会 発行

鵠沼郷土資料展示室運営委員会・鵠沼を語る会・藤沢市郷土歴史課　主催

鵠沼郷土資料展示室企画展示関連企画

歴史講座「江戸時代鵠沼村の弘法大師信仰」

講師　圭室文雄（たまむろ）氏（明治大学名誉教授）

日時：２０１８年（平成３０年）６月２３日（土曜日）
午後１時３０分～午後４時

会場：鵠沼市民センター　大ホール

プログラム

主催者挨拶

歴史講座「江戸時代鵠沼村の弘法大師信仰」前半

休憩（１０分）

歴史講座「江戸時代鵠沼村の弘法大師信仰」後半

質疑応答・　閉会

鵠沼郷土資料展示室　企画展示
「むかしの鵠沼村の信仰と庶民の暮らし」
８月１５日（水）まで開催中
午前１０時～午後４時　休室日：月曜日　鵠沼市民センター

≪次回予告≫

○７月１４日（土曜日）午後１時３０分～午後４時
鵠沼市民センター集合・出発　雨天中止
鵠沼地区内９カ所弘法大師巡礼ウォーキング
定員　４０名　事前申し込み（受付期間6月25日～7月13日）

申込・問合せ　鵠沼郷土資料展示室運営委員会（鵠沼市民センター内）
TEL 0466(33)2001　FAX 0466(33)2203

歴史講座講演録

江戸時代鵠沼村の弘法大師信仰

講師　圭室（たまむろ）文雄氏（明治大学名誉教授）

講 演 録 …… p1 ～p17

講師紹介 …… p18

講演資料 …… p19～p31

第 1 表　江戸時代　古義真言宗・新義真言宗寺院の対比

第 2 表　『新編相模国風土記稿』に見る寺院分布　1830 年現在

第 3 表　相模国古義真言宗寺院本末表　1633 年現在

資料一　相州鎌倉内藤沢感応院法談所無寺領　2018.6.23 鵠沼公民館講演資料

第 4 表　慈眼院歴代住職

第 5 表　高野山慈眼院入衆帳にみる末寺僧の登山時期（1728 年～1878 年）

第 6 表　江戸時代慈眼院の檀那場（武蔵国・相模国）の村数

第 7 表　相模国四郡から慈眼院へ宿泊した年代と人数

資料二　嘉永三（1850）「祠堂料定」　2018.6.23 鵠沼公民館講演資料

第 8 表　鵠沼村　普門寺の弟子高野山慈眼院入衆の僧侶

資料三　鵠沼村　2018.6.23 鵠沼公民館講演資料

第 9 表　伊勢参宮道中日記にみる見物・宿泊地（羽鳥村）　文政 11 年（1828）

地 図 …… 折り込み

伊勢参宮道中日記にみる見物・宿泊地（第 9 表を地図表示）

相模国準四国八十八ヶ所札所

歴史講座

江戸時代鵠沼村の弘法大師信仰

講師　圭室 文雄（会員）

はじめに

ご紹介に預かりました圭室です。私はこの公民館から 100mくらいはなれた所で、昭和 10 年（1935）に生まれました。小学校の３年生の時までそこに住んでおりました。戦争が激しくなって父が兵隊に取られましたので、両親の郷里が熊本でしたので、縁故疎開で熊本へ行きまして、その後、高校を卒業するまで熊本におりました。それから東京で学生生活をおくり、その後昭和 35 年（1960）にこの地に舞い戻って参りました。ですから私の年齢から 15 年差し引きました 68 年間は鵠沼に住んでおります。

講演される圭室文雄氏

小学校の３年生まで藤沢第三国民学校（鵠沼小学校）に通っておりました。今の藤沢警察署の所から海岸に向かって広い道がありますが、その頃はあのあたりはずっと田圃と畑ばかりでして、子供の頃はその田圃道を歩いて学校に通っておりました。鵠沼伏見稲荷神社もこの頃創建されたと記憶しています。今は随分様変わりしたと思っております。

さて本題ですが、「鵠沼を語る会」では丁度 10 年前、2008 年ですが、似たようなテーマで話をさせて頂きました。その時に「相模国準四国八十八か所霊場」が江戸時代にこの地域にあったという話をしました。「鵠沼を語る会」の方々は非常に真面目な方が多く、その折私がお渡ししたのは江戸時代の相模国準四国八十八か所霊場の簡単な地図でしたが、「鵠沼を語る会」の方々が四つくらいの斑に分かれて現地調査をし、総て写真に撮り、今日皆様のお手元に渡した表をつくって下さいました。さらに詳しい絵図も作って下さいました。

実に実証的に細かく丹念に調査された成果が鵠沼郷土資料室で展示されています。

８月 15 日まで展示されていますので、これを詳しく見て頂ければ相模国準四国八十八か所霊場がどのようなものであったか、ご理解いただけるものと思います。

ただ、なぜ江戸時代に相模国準四国八十八か所霊場をまじめに作ろうとした浅場太郎右衛門のような人物が鵠沼村に居たのか、について今日は話をしたいと思います。

弘法大師とは、空海（774～835）の事です。816 年修行道場として高野山を開いています。宗派は真言宗です。823 年には京都に東寺を開創しています。921 年醍醐天皇から「弘法大師」の諡号を受けています。空海は生身のまま禅定に入ったとされ、入定留身信仰がおこり、現在に至っています。著書としては『山家学生式』・『性霊集』・『十住心論』などがあります。

高野山奥之院には 1640 年代から全国の大名達の分骨を納めた五輪塔の墓石が数多く建立されています。奥之院の空海の廟所が極楽浄土の入り口とされ、全国から多くの人々が参詣に訪れています。

高野山に数多くある塔頭寺院は 1550 年頃から戦国大名とつながりをつけ、領国内を布教しています。相模国では相模川の西側の村々は主に高室院、東側の村々は主に慈眼院が霞場（檀那場）として毎年お札配りに訪れ、「南無遍照金剛」・「弘法大師御影」・「加持土砂」を配り、初穂銭を集めています。鵠沼村の人たちは伊勢参りに行き、更に高野山に登り慈眼院に宿泊し、近親者の菩提供養をおこなっています。その様な記録は現在高室院に残されています（慈眼院は明治初年に廃寺になり慈眼院の史料は高室院に残されています）。本日の講演は以下の様な内容で進めてまいります。

1、江戸時代の真言宗寺院

イ　真言宗寺院の全国展開

ロ　相模国の諸宗派寺院の分布

ハ　相模国の古義真言宗寺院

ニ　藤沢感応院の末寺（1633 年・1791 年）

2、高野山慈眼院の様子

イ　慈眼院の歴代住職

ロ　慈眼院で学ぶ僧侶の出身地

ハ　慈眼院の霞場

ニ　慈眼院に宿泊した相模四郡の人々

ホ　慈眼院の供養料

3、鵠沼村と慈眼院

イ　普門寺の弟子で慈眼院で修行した者

ロ　鵠沼村の慈眼院檀家数と有力者

ハ　羽鳥村の道中記

む　す　び

◇

1、江戸時代の真言宗寺院

イ　真言宗寺院の全国展開

それでは第１表「江戸時代　古義真言宗・新義真言宗寺院の対比」を見てください。古義真言宗は寛政３年（1791）、新義真言宗は寛政７年（1795）の寺院本末帳に記されている寺院数を集計した表です。いずれの史料も水戸市彰考館文庫が所蔵しています。古義真言宗の有力な本山は高野山金剛峯寺・東寺・仁和寺・大覚寺・善通寺・勧修寺などです。一方、新義真言宗の有力本山は根来寺・醍醐寺・智積院・長谷寺などです。

古義真言宗と新義真言宗の違いについて若干述べておきます。本来はいずれも高野山金剛峯寺を本山とする真言宗でしたが、平安時代後期の保延６年（1140）金剛峯寺住職覚鑁（かくばん）が当時、盛んになった阿弥陀信仰を取り入れたため高野山内の衆徒と対立して、覚鑁が高野山を去り根来寺に新義真言宗を開宗しました。この時から高野山派を古義真言宗と呼ぶようになり、一方、根来派を新義真言宗と呼ぶことになりました。

まず全国を表の No1～No26 までを東国地方とし、No27～No68 までを西国地方として、古義真言宗と新義真言宗の寺院分布を検討してみますと、東国の古義真言宗は 2,431 か寺で、全体の約 24.1％にあたります。これに対して西国は 7,648 か寺で、75.9％と、西国が圧倒的に多いことがわかります。古義真言宗で寺院数がとりわけ多い地域は高野山の地元紀伊国と備中国です。

新義真言宗では東国が 12,984 か寺で、全体の約 88.6％を占め、極めて多く、この中でもとりわけ多いのは武蔵国・常陸国・下総国・陸奥国・下野国などです。これに対して西国は 1,669 か寺で、全体の約 11.4％に過ぎません。同じ真言宗でありながら古義真言宗と新義真言宗の地域分布はかなり相違していることがわかります。

今回対象とする相模国の古義真言宗は東国では第１位を占め、378 か寺が存在しています。これに対して新義真言宗は３か寺のみです。その意味では相模国は高野山金

剛峯寺の拠点のひとつであり、弘法大師信仰がかなり強かったことが指摘できます。次に相模国はどのような仏教の諸宗派寺院があったか見てみましょう。

ロ　相模国の諸宗派寺院の分布

第２表を作成するに当たって利用した史料は『新編相模国風土記稿』です。天保元年（1830）頃の寺院数です。寺院総数は1,856か寺あります。

まず郡ごとの寺院数を検討します。第１位は大住郡（元禄年間の村数127か村）377か寺、第２位鎌倉郡（村数89か村）299か寺、第３位高座郡（村数118か村）264か寺、第４位三浦郡（村数76か村）259か寺、第５位足柄下郡（村数84か村）246か寺です。なお寺数の少ないのは淘綾郡（村数 21 か村）57 か寺、津久井郡（村数 27 か村）111か寺となっており、いずれも村数が少ないところです。

次に宗派毎の寺院数を検討します。第１位は曹洞宗375か寺、第２位は古義真言宗358か寺、第３位は臨済宗263か寺、第４位は浄土宗257か寺、第５位は日蓮宗218か寺となります。本稿で対象とする古義真言宗は寛政３年（1791）には378か寺であったものが40年後のこの時期は20か寺減少しています。これに対して新義真言は寛政７年（1795）3 か寺であったものが 14 か寺になり、11 か寺増加している様子がわかります。

この表で相模国の仏教諸宗派を検討してみますと、大別して密教系（天台宗・古義真言宗・新義真言宗・真言律宗・日蓮宗・本山修験･当山修験・羽黒行人）827か寺、浄土系（浄土宗・一向宗東本願寺派・一向宗西本願寺派・一向宗高田派・一向宗専修寺派・時宗）379か寺、禅宗系（臨済宗・曹洞宗・普化宗・黄檗宗）650か寺です。

講演を熱心に聞き入る大勢の聴衆

このような数字から密教系が最も多く、次いで禅宗系、最も少ないのが浄土系という事になります。

ハ　相模国の古義真言宗寺院

第３表の史料は寛永 10 年（1633）「関東古義真言宗寺院本末帳」のうち、相模国の寺院のみを拾い出して表示したものです。原本は国立公文書館内閣文庫が所蔵しています。

相模国の有力な中本山 23 か寺とその末寺数を記しています。総寺院数は 336 か寺あります。

中本寺の中で多くの末寺を抱えているのはNo8 金剛頂院とNo16 青蓮寺の 32 か寺です。次いでNo4 宝金剛寺 30 か寺あたりです。末寺数の項が白紙の所は末寺がない寺です。学林の項は僧侶を教育する寺院で、僧侶の学校と言い換えてもいいです。常法談所とあるのは１年間常時僧侶を受け入れる寺院です。法談所とのみあるのは１年間に冬の期間 90 日と夏の期間 90 日の２回僧侶を受け入れる寺院です。勿論寺格が高いのは常法談所の寺です。

備考の欄に別当寺とあるのはそれぞれの神社の祭祀権を握っている寺で神仏習合です。廃寺とあるのは明治元年（1868）明治政府の神仏分離政策により、廃寺となった寺です。古義真言宗の中本寺を郡毎にみますと、大住郡が５か寺、高座郡・鎌倉郡・津久井郡がそれぞれ４か寺ずつあります。

ニ　藤沢感応院の末寺

資料一では 1633 年と 1791 年の２回の「関東古義真言宗本末帳」から感応院末寺を拾い出したものです。いずれの時期も感応院末寺は 12 か寺です。感応院を取り上げたのは、ここで問題にする鵠沼村普門寺の中本寺にあたるからです。この 12 か寺の僧侶はいずれも藤沢宿感応院で教相（教学）と事相（修法）を勉強しています。先ほど表に見たように感応院は法談所と記されていますので、１年間に冬と夏の二回 90 日間泊り込みで生活し、教相・事相を修学することになり、合計 180 日間で法臈（僧侶経験）１年と計算します。15～16 歳から 21 歳まで続けなければなりません。これが終わると僧侶達は高野山慈眼院で約 20 年間の僧侶生活を送ることになります。

感応院の末寺は相模国の割合狭い範囲にあります。現行行政区でみてみますと、藤沢市域には荘厳寺･成福寺・金剛院・普門寺・宝珠寺・宝泉寺・成就院の７か寺、茅ヶ崎市域には千手院・広徳寺の２か寺、横浜市域には宝蔵寺・東福寺の２か寺、大和

市域には真福寺といったところです。これらの末寺の出家たちは中本寺の感応院で必ず６～７年間修行しなければなりません。

次に感応院の本山である高野山慈眼院の様子について述べます。

2、高野山慈眼院の様子

慈眼院は『金剛峯寺諸院家析負輯』（続真言宗全書刊行会）によれば「慈眼院開基、嘉吉元年（1441）相州鎌倉極楽寺入道之草創也、于時宝永辛卯（1711）年２月 28 日丑上尅炎上悉以焼失」と見えています。慈眼院の開創は室町時代の 1441 年としています。しかし宝永７年＝正徳元年（1711）２月に火災で総ての伽藍が焼失したとしています。当然の事ながら慈眼院の史料は総て焼失し、現在 1711 年以前の史料は全く残っていません。しかしその後明治初年に至る史料はかなりの量高室院に残されています。

イ　慈眼院の歴代住職

第４表は『金剛峯寺諸院家析負輯』で作成しました。

初代の栄運のとき武蔵国多摩郡を檀那場（霞場）にすることを、永禄８年（1565）６月 21 日戦国大名八王子城主北条氏照と慈眼院が契約している史料が、下山治久『戦国遺文』後北条氏第２巻に記されています。内容は「武州多西郡（武蔵国多摩郡）半沢覚円坊（木曽村本山修験触頭）先達の鷲（鷹カ）野（高野山）参詣の者、前々の如く峰之坊（慈眼院）を宿坊とすべし、横合あるべからざるものなり、よって件の如し」とあります。相模国の東側にもこの頃から檀那場を広げていったと考えられます。

その後、相模国の東側の諸郡の檀那場について高室院と争論を続けています。年次のみ記してみますと、文禄５年（1596）、慶長 12 年（1607）、慶安３年（1650）、寛文９年（1669）の４回が大きな争論に発展しています。しかしこの様な抗争の機会を捉え、慈眼院は武蔵国の西側から相模国東側の村々へと檀那場を拡大していきました。

次に「慈眼院歴代住職」の第４表をみて下さい。この表には 19 名の住職名が記されています。

出生地は歴代住職の出身地、とりわけ 10 代目了弁・12 代目智剛・13 代目賢忠・14 代目寛耕・15 代目観声・16 代目泰栄の６名はいずれも相模国の出身者です。この事から先述の相模国有力寺院の法談所で 15～16 歳で出家している人物ばかりであった事がわかります。

またこれらの人物が慈眼院の住職になった時、当然の事ながら相模国出身者を高野

山で教育する立場にもなります。つまり相模国の檀那場とのつながりはもとより、末寺の僧侶を弟子として教育する事で本寺と末寺の関係も強力な絆で結ばれることになりました。

一方で伊勢参りの後に高野山参詣を行い、慈眼院を宿坊とする相模国の民衆も安心して泊まれる宿であり、身近な僧侶が慈眼院に滞在しており、かつ馴染みの僧侶が近親者の供養をしてくれ、又高野山内を案内してくれるのですから、安心してついていけます。民衆にとって高野山は伊勢参りの旅で一番心の休まる場所であったともいえます。高野山参詣が盛んであった 1750 年～1800 年頃にかけての慈眼院は末寺や檀那場の庶民とのつながりが強い時代であったともいえます。

表の備考の欄は高野山内の塔頭名を記したものです。いずれの僧侶もいくつかの塔頭の住職を勤めて、僧侶の階級を上げています。

最高位の金剛峯寺住職になったのは５代目の実慶で、金剛峯寺 230 世寺務検校法印と記されています。

無量寿院は金剛峯寺に次ぐ名刹ですが、この寺の住職になったのは９代目宥永、12 代目智剛、14 代目寛耕の３名です。

相模国の西側を檀那場としている高室院住職になったのは 12 代目智剛、14 代目寛耕、16 代目泰栄の３名です。いずれも相模国で対立抗争を続けている高室院住職になったのはやや皮肉な人事異動です。

（閑話休題）

慈眼院のライバルで相模国西部に檀那場を持っていた高室院住職になった相模国出身の者はかなりいます。僧名と没年のみを記してみます。

高室院住職になったのは長運（1505 年没）・高桓（1719 年没）・臨恭（1732 年没）・智翁（1756 年没）・智剛（1781 年没）・寛耕（1791 年没）・泰栄（1805 年没）・浄応（1825 年没）の 8 名にのぼります。1700 年頃から 1820 年頃にかけて慈眼院と同様に相模国出身者を住職に据え、末寺と檀那場との関係を強化していったものと思えます。

ロ　慈眼院で学ぶ僧侶の出身地

先述のように鵠沼村普門寺で、15～16 歳で出家した僧侶は藤沢宿にある感応院で 21 歳まで、１年に冬と夏の 90 日間合計 180 日間修行し、法臘（僧侶の修行年数）６～７年をとり、高野山慈眼院で更に高度の学問と修行を繰り返すことになります。一方、慈眼院では檀那場のある地域から僧侶を集め教育をします。

第５表「高野山慈眼院入衆帳にみる末寺僧の登山時期」の表を見てください。1728

年～1878 年の 151 年間で、慈眼院で学んだ僧侶は 490 名にのぼります。１年平均３～４名の僧侶が入山した事になります。国名がわかるのは 12 か国です。

入山僧の多い国順にみてみますと相模国（神奈川県）359 名・阿波国（徳島県）58 名・周防国（山口県）35 名・武蔵国（東京都八王子市）16 名といった順番になります。この他の国はいずれも 1 桁の数字です。この事からこの表に掲げた地域に慈眼院が末寺をもっており、檀那場も支配していたと考えられます。

僧侶数が抜きん出て多いのは相模国です。全体の僧侶数から不明の国名の分７名を差し引き、全体を 483 名としますと、相模国の入山者（慈眼院での修行者）は全体の約 74.3%になります。この事から慈眼院と相模国の末寺とのつながりが強かった事が伺えます。更にその事は檀那場の村を数多く押さえていたともいえます。

次いで多いのは阿波国です。最初の第１表で古義真言宗の欄を見ていただくと阿波国には 526 か寺の末寺があります。周防国も 108 か寺の末寺があります。勿論それぞれの国の一部の末寺とは思いますが、慈眼院に入山していることがわかります。武蔵国は東京都八王子市にある金剛院の弟子が慈眼院に入山した数字です。金剛院は武蔵国の村々の慈眼院檀那場を受け持っていた寺院でした。

以上の事から慈眼院が相模国末寺と強いつながりをもっていた事が指摘出来ます。

ハ　慈眼院の霞場（檀那場）

第６表では慈眼院の武蔵国と相模国の檀那場を表示してみました。史料は高室院が所蔵している「慈眼院登山帳」です。

まず表の上段の武蔵国からみていきます。いずれも相模国に近い４郡です。多摩郡を除いた３郡は神奈川県横浜市と川崎市の村々です。慈眼院は戦国大名で八王子城主であった北条氏照と多摩郡について師檀契約（領国内を檀那場とする）を結んでいた事は先述しました。しかし 1700 年代のこの史料によると多摩郡も約５割を檀那場として支配するに過ぎず、他の５割は高野山の他の塔頭に侵略されていることがわかります。この段階の武蔵４郡における檀那場は 33.6%程度にすぎません。

これに対して相模国の様子を見てみましょう。点線から上部が相模川の西側の郡名、点線より下の部分が相模川の東側の郡名です。%を見ていただくと%の数字は総村数に対する檀那場の村の比率を出したものです。

西側の４郡の総合計は総村数が 334 か村で、慈眼院の檀那場の村数が 30 か村と言う数字を得ます。つまり西側の４郡で慈眼院は約９％の村しか押さえていません。

これに対して東側の５郡の総合計を出してみますと総村数が 356 か村、慈眼院の檀

那場の村が 217 か村で、約 61%の村を押さえています。

先述の如く西側の村を抑えているのは高野山塔頭高室院です。これに対して東側の村の約 39%を押さえているのも高室院です。

高室院と慈眼院がしばしば争論していることを先述しましたが、その結果がこのような次第です。

なお慈眼院は東側の郡では津久井郡・鎌倉郡･高座郡の順でそれぞれの郡の多くの村数を把握していることがわかります。鵠沼村は高座郡ですので慈眼院の勢力がかなり強い地域であった事がわかります。

次に慈眼院の檀那場であった東側４郡の慈眼院宿泊者数を詳しくみたいと思います。

ニ　慈眼院に宿泊した相模４郡の人々

相模国の東側には５郡ありますが、先述の第６表で見たように三浦郡は 76 か村ありますが、慈眼院がおさえていた檀那場の村は３か村に過ぎません。それゆえここでは省きました。三浦郡の残りの 73 か村はいずれも高室院の檀那場です。

第７表「相模４郡から慈眼院へ宿泊した年代と人数」の表を検討します。この表を作成した史料は高室院に残されている「相模国慈眼院登山帳」(『寒川町史調査報告書』６）です。

年代は 1711 年～1867 年にわたる 157 年間のものです。「登山帳」とは高野山慈眼院の宿帳と言い換えてもいいと思います。

４郡の登山者の総合計が 15,125 名です。この数字だけをみれば４郡から１年平均 96.3 名の人々が宿泊していることになります。しかしこの地域からの伊勢参りの旅の行程は東海道を通り伊勢神宮から高野山を参詣し、奈良～大坂～京都をまわり帰途はまた東海道を通ります。ほぼ１か月半の行程です。そのため多くの人々は高野山では必ずしも慈眼院に宿泊はしません。つまり先を急ぐため宿泊しない人々も多かったと考えられます。この史料に書かれている宿泊者の数倍の人が高野山を訪れていたと思われます。

４郡の登山者数では高座郡･津久井郡･鎌倉郡･愛甲郡の順となります。

４郡の登山者合計数を 50 年刻みで見てみますと､1711 年～1760 年は 4,040 名､1761 年～1810 年は 5,284 名､1811 年～1860 年は 4,368 名となります。しかし 1811 年～1860 年ころから下向線を辿り、1861 年以降参詣者は激減している様子がわかります。この表で見ると 1761 年～1810 年頃が高野山参詣が盛んだったともいえます。

備考欄をご覧ください。江戸時代の３大飢饉といわれた享保の飢饉、天明の飢饉は

その前 10 年間の参詣者と殆ど変化がありませんが、天保の飢饉のときはさすがにその前 10 年間に比べると激減しています。この頃は相模地域においても飢饉の被害が大きかった時期です。

伊勢神宮が広報活動をした「おかげ参り」の年は直前 10 年に比べると参詣者が増加しています。しかし 1867 年の「ええじゃないか運動」は相模国ではそれほど盛り上がっていない事が指摘出来ます。

弘法大師の遠忌の年は高野山の使僧達が各地に勧進（寄付集め）にやってきますが、その盛り上がりをみてみましょう。この表では３回の遠忌の年が含まれています。つまり弘法大師 900 回遠忌・950 回遠忌・1000 回遠忌です。しかしこの表を見る限り相模国の人々が高野山参詣に積極的に参加したとは思えません。とりわけ 1000 回遠忌のときは天保の飢饉と重なり、参詣者数は減少したと思われます。

ホ　慈眼院の供養料

高野山参詣のおり朝の勤行（朝課）の時、宿泊者は宿坊の慈眼院で必ず近親者の菩提供養をします。時代によって供養料の値段は違いますが、ここで取り上げた資料二は幕末の嘉永３年（1850）の値段表です。換算率は注に記しておきましたので参照して下さい。

参詣者によって供養料は必ずしも同じではありませんが、割合多く書かれているのは「月牌料金１歩」です。現在に換算する事は難しいですが、金１両＝８万円くらいと考えられますので、金１歩はその四分一ですので、２万円くらいかと思います。人によっては月牌料を菩提３つとか菩提４つとか支払っているケースもありますし、また年回忌供養などでももっと多額の費用を出している場合があります。

3　鵠沼村と慈眼院

イ　普門寺の弟子で、慈眼院で修行した者

鵠沼村は高野山慈眼院の檀那場です。一方、普門寺は藤沢宿感応院が中本寺で、その本山が高野山慈眼院という関係です。

第８表をご覧ください。この表は「慈眼院入衆僧名帳」と「慈眼院登山帳」で作成しました。慈眼院に入山した僧侶は享保８年（1723）～明治７年（1874）の 152 年間で 14 名です。しかし №6 と №7 は現住とあるので、この段階で既に普門寺住職であった事がわかります。この二人は修行のため慈眼院に行ったのではなかったのかも知れません。

僧名の項で（普門寺僧）と記されているのは僧名が記されてない者です。ところで慈眼院に入った年月日はわかりますが、退山（修行が終了した）年がわかるのは３名のみです。本山の慈眼院での修行期間は原則的には 20 年です。仏教各宗派とも年齢が 40 歳前後で正式な僧侶資格を与えています。その折、寺を持ち住職になることが出来るのが普通ですが、No9 は 17 年、No10 は 15 年、No11 は５年となっています。No11 を例外とするとこの時期は修行期間が 15 年から 17 年位に短縮されていたのかも知れません。

慈眼院入山年齢はいずれも 21 歳と思います。ですから鵠沼村から慈眼院に宿泊した多くの人は普門寺の弟子に会える機会もあったと思われます。

ロ　鵠沼村の慈眼院檀家数と有力者

資料三を見て下さい。これは高野山慈眼院の使僧が鵠沼村に毎年の如くお札配りにやってきた時の記録です。宿文とあるのは、宿とは宿泊は普門寺でする事です。文は慈眼院からの普門寺への協力依頼状を持って来たことを指します。

最初に普門寺の事を記しています。前の住職宥実が慈眼院に対して燈油料として金 15 両を納入しています。現在の値段に直しますと約 120 万円くらいでしょうか。相当な金額です。

次の「布施願」ですが、鵠沼村は南側が旗本布施孫之進の支配する土地ですので、布施氏に了解を求めて札配りをする、という意味です。

次に定右衛門・浅場太郎右衛門は普門寺にとっても慈眼院にとっても有力な檀家です。とりわけ浅場太郎右衛門はこの時金７両（約 56 万円）を寄付しています。そのため慈眼院は「南無遍照金剛」と書かれた２尺（60ｃｍ）の木札を渡しています。また浅場太郎右衛門は普門寺門前に石灯籠を寄贈した人物であると記しています。次の小林三左衛門は村役人で、名主（庄屋）です。この人には１尺８寸（54ｃｍ）の木札を渡しています。この他組頭が５名いた事がわかります。組下とは鵠沼村で布施孫之進の支配下村民が 80 軒であったということです。慈眼院が持参したお札は名主小林三左衛門に預けて、名主から 80 軒に配ってもらう、としています。

「江川願」とあるのは、鵠沼村の北側、つまり東海道に近いほうは幕府の直轄領（天領）でしたので、代官江川太郎左衛門が支配していましたので、江川氏の了解を得ることを指しています。

関根傳左衛門・斎藤六左衛門･山上八右衛門はいずれも普門寺と慈眼院の有力檀家です。慈眼院は３人に１尺８寸の木札を渡しています。組頭は５人としています。

北側の集落は120軒であった事がわかります。このお札も名主斎藤六左衛門に預けています。特にこの集落は普門寺の檀家は100軒だけとしています。残りはいずれも一向宗（浄土真宗）の檀家で、その多くの家は高野山慈眼院のお札は受け取らないとしています。

この外、毘沙門堂にはこの時期、山伏がすんでいた様子がわかります。寸法はわかりませんが慈眼院は木札を渡しています。

（付札）は２年後の鵠沼村の組頭を書上げたものです。

この時の慈眼院の檀家は布施氏支配の 80 軒、江川氏支配の 120 軒で、合計 200 軒になります。鵠沼村は『新編相模国風土記稿』によると天保元年（1830）の戸数は 250 軒と記されています。

この史料から普門寺を別にすると特に浅場太郎右衛門の慈眼院に対する貢献度が目立っています。

渡辺万右衛門の「納経帳」

鵠沼普門寺ご住職が十数年前に仏像の解体修理をされた時、胎内から出てきたとされた近世文書があります。それを拝見すると表紙に「明和二乙酉四月十五日、大乗妙典奉納帳、願主高座郡鵠沼村渡辺万右衛門」とあります。

最初のページには「往来証文之事」とあります。これは全国の寺社参詣の折の往来手形で、檀那寺普門寺住職が、この本人がキリシタンでないことを身分保証し、廻国先の国々の関所役人に宛てたものです。「納経帳」はかなり黒ずんでいて、全体を判読する事は困難ですが、表紙には明和二年（1765）とあり、普門寺住職の印鑑も押してあります。しかし本文を検討しますと明和６年（1769）渡辺万右衛門が各地を廻国し作成した名社・名刹の「納経帳」であることがわかります。表紙はおそらく後年史料を整理するときに改めてつけられたものと思います。

さて「納経」とは、本来は霊場に「法華経」を書写して納めることでありましたが、江戸時代には霊場に経巻の代わりに若干の金銭を納めるようになりました。参詣のしるしに寺社印・宝印を受けています。これを「納経帳」といいます。納経の目的は本人の現世の安穏・来世の極楽往生を祈願する事、或いは近親者の冥福を祈ることなどです。

渡辺万右衛門の参詣巡回コースは、明和６年２月７日、江戸上野の寛永寺から始めて、増上寺・傳通院・幡随院・霊巌寺をまわり、一旦鵠沼に帰宅したようです。２月 13 日に再び廻国の途につきます。まず藤沢山清浄光寺（遊行寺）・寒川神社別当寺薬

王院、16 日には海老名国分寺・星谷寺（坂東８番札所）、17 日には長谷寺（坂東６番）・日向薬師宝城坊、18 日には浄発願寺・大山寺、19 日には金目山光明寺（坂東７番）、20 日には飯泉山勝福寺（坂東５番）、23 日は伊豆山権現般若院、30 日は三島大明神・三島国分寺、３月１日は駿河国八幡宮、７日は駿河国一宮大明神、８日は駿河国国分寺、15 日は遠江国一宮大明神蓮増教院とそれぞれで「納経帳」に書き入れています。旅は東海道をさらに登っていきます。（この期間の詳細は省略します）４月 12 日には伊勢に到着して伊勢神宮に参詣しています。この時点で藤沢から数えて約１か月です。

ところで、鵠沼村渡辺万右衛門は普門寺の檀家ですので、当然高野山慈眼院に参詣するはずですので、「慈眼院登山帳」（『寒川町史調査報告書』６）の鵠沼村の所をみますと、この年明和６年５月 12 日に鵠沼村森半右衛門と二人で宿泊していることが記されています。この時点で藤沢を出てから２か月目にあたります。

そこで高野山慈眼院に宿泊した前後の渡辺万右衛門の巡拝コースを辿ってみます。伊勢からは熊野灘よりのコースを取り南下しています。明和６年４月 24 日熊野新宮・熊野那智大社実方院（西国１番青岸渡寺）、26 日熊野本宮、５月５日正八幡宮雲生寺・道成寺、９日紀三井寺（西国２番）・和歌山東照宮、10 日根来寺明王院・紀伊国国分寺、11 日紀伊国一之宮一宮寺・粉川寺を巡拝しています。

高野山慈眼院に宿泊した後は５月 13 日高野山奥之院、15 日は慈尊院（女人高野）、16 日は施福寺（西国４番）・和泉国国分寺、17 日大鳥神社、18 日大坂住吉大明神・四天王寺・葛井寺（西国５番藤井寺）、19 日河内国壺井権現、19 日当麻寺、20 日大和国壷坂寺（西国６番）、23 日金峯山・大峯大権現、24 日多武峰護国院です。

その後、畿内の西国三十三観音霊場を廻り更に山陽道を須磨まで下り、船で四国に渡っています。四国は讃岐国（香川県）から八十八か所霊場を廻っています。最初は明和６年６月 22 日第 80 番讃岐国国分寺から廻り始めています。６月 28 日には阿波国（徳島県）に入り第３番札所金泉寺から廻り、７月 12 日には土佐国（高知県）に入り、第 24 番最御崎寺から始めています。８月４日頃伊予国（愛媛県）に入り第 43 番明石寺からまわり始めています。その後、讃岐国に再度入り、９月１日第 75 番善通寺（空海生誕地）で終わっています。四国に入ってから 70 日目にあたります。その後の部分は欠落しています。これより以前の四国の部分でもところどころ抜けている所もあります。抜けているのは阿波国１か寺、土佐国３か寺、伊予国 14 か寺、讃岐国 10 か寺です。しかし判明するだけでも四国八十八か所のうち 59 か寺、つまり全体の 67％の寺社印・宝印は記されています。この外にも大社・名刹 12 か所が含まれています。この納経帳は不備ではありますが、全部そろっていれば渡辺万右衛門は四

国八十八か所霊場すべて廻ったものと考えられます。それにしても渡辺万右衛門の旅は相当な強行軍であったといえます。浅場太郎右衛門もおそらくこの納経帳を見せてもらったと思います。

実はもう１人鵠沼村で高野山に参詣し、西国三十三観音霊場めぐりをした人物がいます。宝暦 13 年（1763） ４月 18 日慈眼院に宿泊した高橋吉三郎です。

浅場太郎右衛門の高野山参詣

浅場太郎右衛門の「太郎右衛門」は浅場家の通り名（代々継承する名前）です。相模国準四国八十八か所霊場を企画したのは文化２年（1805）に死去した父親で、実際に相模国準四国八十八か所霊場を設立したのは文政 10 年（1827）に死去した息子です。まずは父親浅場太郎右衛門について述べます。

同じ鵠沼村に住み、普門寺の檀家で日常交流のあったと思われる高橋吉三郎の西国三十三観音霊場めぐりや、渡辺万右衛門の大社・名刹・西国三十三観音霊場・四国八十八か所霊場巡拝の動きは、浅場太郎右衛門にかなり影響力があったと思います。

浅場太郎右衛門が初めて高野山慈眼院に登山したのは「慈眼院登山帳」によると渡辺万右衛門が慈眼院に宿泊した２年後の明和８年（1771） ８月 24 日のことでした。この時は１人で行っています。その後２回目は２年後の安永２年（1773） ３月 19 日慈眼院に宿泊しています。この時は菩提寺である普門寺住職と２名で行っています。３回目はやや時間が空いて、寛政 11 年（1799）１月 23 日鵠沼村から浅場太郎右衛門・須藤藤右衛門・山口六郎右衛門・渡辺勘右衛門の４名で慈眼院に宿泊しています。４回目は４年後の享和３年（1803）閏１月３日浅場太郎右衛門・林佐吉・榛葉利右衛門・森武兵衛・渡辺鉄五郎・渡辺徳治郎の６名で宿泊しています。

父親の浅場太郎右衛門は1771年～1803年までの33年間に実に４回も高野山参詣をしています。弘法大師信仰に極めて熱心であったといえます。これは身近にいた高橋吉三郎や渡辺万右衛門の刺激を受けた結果であろうとも思われます。

普門寺の相模国準四国八十八箇所供養塔

鵠沼村普門寺（高野山真言宗）の山門を入ると、右側に大きな石塔が建っています。石碑の前面には「南無遍照金剛、国家安穏、準四国八十八箇所供養塔」と記されており、左の側面には「文政十丁亥三月廿一日、願主光明真言摠講中」と記されています。実はこの年文政 10 年（1827） ２月１日鵠沼村の人々12 名で高野山慈眼院に宿泊しています。名前を記しますと、浅場弥五兵衛・内田金三郎・関根市右衛門・関根仁兵衛・

関根惣左衛門・関根安左衛門・宮崎清四郎・宮崎利右衛門・宮沢平左衛門・山口作兵衛・山口傳七・山口六兵衛です（『寒川町史調査報告書』６）。

おそらくこれらの人々が石碑にある光明真言摠講中のメンバーと思われます。文政３～４年を中心としてこの地域に相模国準四国八十八か所霊場を設立したため、そのお礼を兼ねて、相模国準四国八十八か所霊場創設の報告のため、高野山奥之院の弘法大師霊廟に参詣したと思われます。一行は慈眼院に宿泊した後、奈良・大坂・京都を廻国しても２月末までには鵠沼に帰り着いていると思われますので、この供養塔が完成した頃には高野山参詣をしたメンバーも帰宅し、３月 21 日の普門寺での供養塔落慶法要には参加できたと思います。３月 21 日は弘法大師空海の命日でもあります。

息子の浅場太郎右衛門はこの年、文政 10 年（1827）８月晦日他界しています。ここに登場する浅場弥五兵衛は浅場太郎右衛門に縁のある者と思われます。

ハ　羽鳥村の道中記

第９表「伊勢参宮道中記にみる見物・宿泊地」を取り上げてみたいと思います。史料は藤沢市羽鳥三觜家の文書です。

鵠沼村には「伊勢道中記」は残っていませんので、隣村の羽鳥村の道中記を紹介します。時期は文政 11 年（1828）のものです。先述しましたようにこの前年の２月１日に鵠沼村から 12 名で高野山慈眼院に宿泊した事がわかっています。

しかし「羽鳥村道中記」には藤沢市域では羽鳥村三觜八郎右衛門を始め三觜小太郎・三觜清蔵の３名、鵠沼村から加藤儀右衛門・関根三左衛門の２名、辻堂村鈴木久兵衛・鈴木平兵衛の２名、稲荷村長谷川小左衛門１名、この他茅ヶ崎市域では円蔵村１名、小和田村１名、茅ヶ崎村 12 名、松尾村１名、柳島村２名、矢畑村１名の 10 か村 26 名で２月 11 日高野山慈眼院に宿泊しています。その折の道中日記が、この史料です。

第９表に見るような廻国コースが伊勢参りの一般的なコースと考えていいと思います。少し詳しく内容を検討します。

文政 11 年１月 15 日に羽鳥村を出発して東海道を歩き、更に参宮道を経由して 15 日目の１月 29 日に伊勢に到着しています。道中では名所・旧跡を廻っている様子がわかります。伊勢の宿は高座郡を霞場（檀那場）としていた御師（先達・下級神官）一ノ木神主宅に４泊しています。その後長谷寺（西国８番）を始め、大和国（奈良県）の大社・名刹・霊場を廻り、２月 11 日高野山慈眼院に宿泊しています。この日で、藤沢を出発してから 27 日目になります。

高野山では近親者の菩提供養をして、翌日には弘法大師廟のある奥之院に参詣し、その後大塔や金堂などの大伽藍を見物しています。更に先を急ぎ橋本に下り、紀ノ川沿いを通って和歌山に出ています。それより阿波国（徳島県）へ船で渡り、四国八十八か所霊場の１～３番・86 番をめぐり、２月 19 日には讃岐国（香川県）金比羅山に参詣しています。その後又四国八十八か所霊場 75 番・71 番・84 番・77 番を廻り、丸亀から船にのり田ノ口湊に着船し、それより山陽道を大坂に向かっています。大坂では３泊しています。ここでは芝居見物や名所旧跡をまわり、夜船で淀川を遡り京都へ向かっています。京都では大社・名刹を巡っています。

３月３日には京都御所で「鶏合」（闘鶏）を見学しています。京都では４泊しています。京都を出たあと西国 14 番三井寺と 13 番石山寺にも立ち寄っています。帰途は東海道を東に進んでいますが、名所旧跡には立ち寄っていません。最後には疲れを癒すためか、箱根の温泉に２泊しています。帰宅したのは出発してから 64 日目の３月 9 日でした。

表に書かれている宿の賃銭はいずれも銭です。これを現在の価格になおしてみますと最も高い慈眼院は１泊銭 500 文で、約 6,660 円にあたります。大坂の宿 463 文は 6,170 円、伊勢の宿 410 文は 5,460 円、京都の宿 225 文は 3,000 円です。全体を通じてみると１泊 200 文が多いですが、これは約 2,660 円程度と考えられます。現在のホテル代に比べればかなり安いかも知れません。

この年伊勢参りに同行した 10 か村 26 名は長旅を続ける中で高野山弘法大師の霊廟に参り、少ないながらも四国八十八か所霊場や西国三十三観音霊場に参詣も出来た事で、お互いの親交を深めたことと思います。参加者それぞれの村には相模国準四国八十八か所霊場が造られており、共同体同士のつながりも作り上げることが出来たと思います。

鵠沼村から高野山に参詣した人々

江戸時代の 1711～1867 年までの 157 年間に鵠沼村から高野山に出かけ、慈眼院に宿泊した人数を現存する「慈眼院登山帳」で見ると、267 名にのぼります。多人数で高野山参りをした年次のみ拾い挙げてみますと、16 名が天明６年（1786）、14 名が安永９年（1780）・天保 12 年（1841）、13 名が寛政５年（1793）、12 名が文政２年（1819）・文政 10 年（1827）、10 名が享保 10 年（1725）・文化４年（1807）です。つまり弘法大師信仰がいかに強かったかを表している事例だと思います。当時の人々は慈眼院登山帳には総て姓氏名を記しています。公的な文書では苗字は付していませんが、私的な

宗教行為には既に姓名をもっており、それを記しています。われわれの先祖を語るときには貴重な史料と言えます。

浅場太郎右衛門が企画し、周辺の村々が協力してできた相模国準四国八十八か所霊場は、その後も広い意味で共同体の弘法大師信仰の場としてこの地域の人々に支えられて現在まで続けられていることはすばらしいことと思います。これからも弘法大師空海の石造は大切に保存していかねばならないと思います。

我々が現代の価値観だけで江戸時代の弘法大師信仰を考えることは出来ません。当時の社会情勢の中で史料に則して考えることが重要です。これまで縷々述べて来ましたように高野山塔頭慈眼院のみをとってみても、これほど我々の先祖の生活の中に完璧に入り込んでいた事を明らかにする事が出来ました。浅場太郎右衛門親子を中心として地域社会に弘法大師信仰即ち四国八十八か所霊場信仰が浸透していた事もわかります。

ご清聴有り難うございました。　　…… 拍手 ……

（たまむろ　ふみお）

講演資料（ｐ19～ｐ31）

第１表　江戸時代　古義真言宗・新義真言宗寺院の対比

第２表　『新編相模国風土記稿』に見る寺院分布　1830 年現在

第３表　相模国古義真言宗寺院本末表　1633 年現在

資料一　相州鎌倉内藤沢感応院法談所無寺領　2018. 6. 23 鵠沼公民館講演資料

第４表　慈眼院歴代住職

第５表　高野山慈眼院入衆帳にみる末寺僧の登山時期（1728 年～1878 年）

第６表　江戸時代慈眼院の檀那場（武蔵国・相模国）の村数

第７表　相模国四郡から慈眼院へ宿泊した年代と人数

資料二　嘉永三（1850）「祠堂料定」　2018. 6. 23 鵠沼公民館講演資料

第８表　鵠沼村　普門寺の弟子高野山慈眼院入衆の僧侶

資料三　鵠沼村　2018. 6. 23 鵠沼公民館講演資料

第９表　伊勢参宮道中日記にみる見物・宿泊地（羽鳥村）　文政 11 年（1828）

地図（折り込み）

伊勢参宮道中日記にみる見物・宿泊地（第９表を地図表示）

相模国準四国八十八ヶ所札所

講師紹介

圭室 文雄（たまむろ ふみお）氏

仏教学者 圭室諦成（駒澤大学教授・東京大学史料編纂所教授・熊本女子大学教授・明治大学教授）の長男として、1935 年、高座郡藤沢町鵠沼に生まれ、現在も鵠沼松が岡に在住

國學院大學文学部卒
明治大学大学院文学研究科博士課程履修
明治大学名誉教授
日本近代仏教史研究会会長
日本風俗史学会会長
藤沢市史編纂委員
寒川町史編纂委員長
鵠沼を語る会会員

主要著書

『江戸幕府の宗教統制』（評論社）
『日本仏教史: : 近世』（吉川弘文館）
『葬式と檀家』歴史文化ライブラリー（吉川弘文館）
『日本人の宗教と庶民信仰』（吉川弘文館）
『神仏分離』（教育社）
『遊行日鑑』1～3 巻（角川書店）　など多数

編集註

◇ この講演録は 2018 年 6 月 23 日（土）に鵠沼市民センター大ホールで開催した歴史講座「江戸時代鵠沼村の弘法大師信仰」（鵠沼郷土資料展示室運営委員会・藤沢市郷土歴史課・鵠沼を語る会 共催）での録音から、藤川文子氏が活字化したものに圭室文雄氏が加筆・修正したものです。

◇「相模国準四国八十八ヶ所札所」と「伊勢参宮道中日記にみる見物･宿泊地」の地図（鵠沼郷土資料展示室提供）を折り込みましたので参考にしてください。

◇「相模国準四国八十八ヶ所札所」については「鵠沼を語る会」ホームページ http://kugenuma.sakura.ne.jp/ でも閲覧できます。

第1表　江戸時代　古義真言宗・新義真言宗寺院の対比

	国名	古義真言宗	新義真言宗			国名	古義真言宗	新義真言宗
1	陸奥	25	1,510		36	和泉	249	2
2	出羽	164	551		37	攝津	294	6
3	常陸	12	1,959		38	丹後	81	×
4	下野	18	1,402		39	但馬	175	×
5	上野	331	498		40	因幡	61	
6	安房	9	251		41	伯耆	11	
7	下総	69	1,680		42	出雲	114	×
8	上総		643		43	隠岐	61	
9	武蔵	318	2,963		44	石見	75	×
10	相模	378	3		45	淡路	211	
11	甲斐	84	112		46	播磨	289	17
12	信濃	182	406		47	美作	178	×
13	越後	150	357		48	備前	247	
14	佐渡	10	298		49	備中	1,198	×
15	越中	63	×		50	備後	177	×
16	能登	70	×		51	安芸	80	
17	加賀	39	×		52	周防	108	×
18	越前	48	56		53	長門	80	×
19	若狭	70	×		54	阿波	526	
20	伊豆	46	×		55	讃岐	494	27
21	駿河	66	34		56	伊予	254	174
22	遠江	128	26		57	土佐		229
23	三河	38	×		58	筑前	63	×
24	尾張	11	213		59	筑後	23	×
25	美濃	100	22		60	豊前	90	×
26	飛騨	2	×		61	豊後	32	×
27	近江	7	207		62	肥前	239	73
28	伊勢	99	16		63	肥後	18	34
29	伊賀	50	179		64	薩摩		171
30	志摩	1	1		65	大隅		72
31	紀伊	1,292	7		66	日向	41	134
32	山城	124	64		67	壱岐		213
33	丹波	157	1		68	対馬	2	
34	大和	333	41					
35	河内	114	1					
	合計						10,079	14,653

参考文献　寛政3年（1791）「古義真言宗本末帳」第1巻～第24巻　水戸市彰考館文庫
寛政7年（1795）「新義真言宗本末帳」第1巻～第17巻　水戸市彰考館文庫
（新義真言宗本末帳には護持院・護国寺・根来山支配の分は除くとあり）
×印は明治3～4（1870～71）「寺院明細帳」（国立国会図書館）
に新義真言宗が存在しない国名

第2表『新編相模国風土記稿』にみる寺院分布　1830年現在

宗派	足柄上	足柄下	淘綾	大住	愛甲	高座	鎌倉	三浦	津久井	計
天台宗	4	1	6	37	2	4	3	2	1	60
古義真言宗	29	29	24	98	18	57	54	18	31	358
新義真言宗						3	7		4	14
真言律宗				1			5			6
浄土宗	7	43	9	41	10	36	41	70		257
一向宗東本願寺派		4		6		5	3	20		38
一向宗西本願寺派	3	2	1	2	4	2	5	26	2	47
一向宗高田派						1				1
一向宗専修寺派						1				1
時宗		6	1		3	11	11	2	1	35
臨済宗	14	16		37	15	19	89	26	47	263
曹洞宗	50	71	10	90	37	70	18	21	8	375
普化宗				1				1		2
黄檗宗	1	4		5						10
日蓮宗	2	49	5	18	10	26	55	53		218
本山修験	3	7		24	20	12	1	5	7	79
当山修験	6	14	1	16	4	17	7	14	9	88
羽黒行人				1	1			1	1	4
合計	119	246	57	377	124	264	299	259	111	1856

参考文献　『新編相模国風土記稿』　雄山閣出版

第3表　相模国　古義真言宗寺院本末表　1633年現在

	郡名	村名	中本寺	末寺数	学林	備考
1	足柄上	金子	最明寺	16	法談所	
2	足柄下	元箱根	東福寺	7	法談所	箱根神社別当寺　廃寺
3	足柄下	小田原	蓮上院	10	法談所	
4	足柄下	国府津	宝金剛寺	30	法談所	
5	淘綾	大磯	地福寺	11	法談所	
6	大住	坂本	大山寺	15	常法談所	阿夫利神社別当寺
7	大住	日向	宝城坊			
8	大住	岡崎	金剛頂寺	32	法談所	廃寺
9	大住	八幡	成事智院	13	法談所	平塚八幡別当寺　廃寺
10	大住	須賀	長楽寺	13	法談所	
11	高座	海老名	惣持院	19	法談所	
12	高座	岡田	安楽寺	18	法談所	
13	高座	茅ヶ崎	円蔵寺	13	法談所	
14	高座	濱之郷	常光院			鶴嶺八幡別当寺　廃寺
15	鎌倉	大鋸	感応院	12	法談所	
16	鎌倉	手広	青蓮寺	32	法談所	
17	鎌倉	雪之下	鶴岡八幡宮寺	14	常法談所	鶴岡八幡宮別当寺　廃寺
18	鎌倉	二階堂	一乗院			荏柄天神別当寺　廃寺
19	三浦	逗子	延命寺	18	法談所	
20	津久井	千木良	善勝寺	17	法談所	
21	津久井	日連	青蓮寺	6		
22	津久井	牧野	蓮乗院	12		
23	津久井	葉山嶋	東林寺	5		
	合計		23	313	336	

参考文献　「関東古義真言宗寺院本末帳」国立公文書館内閣文庫所蔵

資料　一

一、相州鎌倉内藤沢感応院法談所無寺領

事教本寺高野山

末寺

普門院寺内御免　宝蔵寺寺内御免　宝珠寺寺内御免

常福寺寺内御免　荘厳寺寺内御免　慶満寺

任僧坊　宝泉寺　真福寺

成就院　金剛院　千手院

已上感応院分訖

（寛永十年二月『関東真言宗古儀本末帳』）

御朱印三石七斗

一、高野山末　鎌倉郡藤沢宿　感応院　末寺十二宇

御朱印八石三斗　同郡瀬谷村　宝蔵院

高座郡藤沢　荘厳寺

同所　成福寺

同所　金剛院

同郡鵠沼村　普門寺

同郡辻堂村　宝珠寺

同所　宝泉寺

高座郡小和田村　千手院

同所　広徳寺

同郡大庭村　成就院

同郡下和田村　真福寺

鎌倉郡宮沢村　東福寺

（寛政三年十一月『相模国古義真言宗本末帳』）

第4表　慈眼院歴代住職

	住職名	出生地	没年月日	没年齢	俗姓（苗字）	備考
1	栄運					1565年北条氏照武蔵檀那場朱印時の住職　1591年僧名帳に記載あり
2	良恩					
3	興栄					
4	海円					1602年高室院との檀那場争論（高座郡）の時の住職
5	実慶	大和国平群郡額田村	1637.9.28		森河	230世寺務検校法印
6	隆実	大和国平群郡額田村	1667閏2.20	52	森河	1649年高室院との檀那場争論（愛甲郡）の時の住職
7	隆寛	大和国平群郡額田村	1730.8.19	55	森河	
8	寛傳	大和国古市	1730.8.19	55	廣瀬	中院・桜池院・龍光院の住職歴任
9	宥水	美作国久米北条郡山手村	1758.1.10		北	高祖院・龍光院・無量寿院の住職歴任
10	良弁	相模国大住郡板戸村	1757.9.9	67	富田	中院・西院・蓮蔵院・万福院・随心院の住職歴任
11	栄央	武蔵国	1772.1.26	50	池田	
12	智剛	相模国大住郡城所村	1781.9.30	77	沢地	閑松院・千蔵院・明王院・遍照光院・高室院・無量寿院の住職歴任
13	賢忠	相模国鎌倉郡梶原村	1786.8.26	78	梶原	宝地院･九品院･龍宝院・薬師院・増長院の住職歴任
14	寛耕	相模国大住郡田村	1791.9.21	76	山田	閑松院・宝珠院・勢観院･増長院・高室院・無量寿院の住職歴任
15	観声	相模国鎌倉郡汲沢村	1792.1.8	70	森	鑁池院・桜池院の住職歴任
16	泰栄	相模国大住郡戸田村	1805.5.19	65	深石	高室院・龍宝院・多聞院の住職歴任
17	広盤	備中国大江村	1809.7.7	45	大江	最勝院住職
18	理淵	讃岐国三野郡仁保村	1822.8.1		塩田	成福院・般若院の住職歴任
19	隆澄	阿波国徳島	1833.3.23	57	太田	随心院･真珠院・三和院・源龍院の住職歴任

参考文献　『金剛峯寺諸院家析負輯』（続真言宗全書刊行会）

第5表　高野山慈眼院入衆帳にみる末寺僧の登山時期（1728年～1878年）

	年代	武蔵	相模	遠江	伊勢	丹波	美作	備中	周防	長門	因幡	阿波	伊予	不明	合計
1	1728 ～ 1730		12	1								3			16
2	1731 ～ 1740		44	1			1		4			3			53
3	1741 ～ 1750	1	42						2			3			48
4	1751 ～ 1760		37						2			2			41
5	1761 ～ 1770	1	23						4			5		1	34
6	1771 ～ 1780	1	25									3			29
7	1781 ～ 1790	1	24	1					1			1			28
8	1791 ～ 1800	3	31						1			1			36
9	1801 ～ 1810	2	10					1	1	1		7			22
10	1811 ～ 1820	2	13	1					2			4			22
11	1821 ～ 1830	2	18						2		1	1	1		25
12	1831 ～ 1840	1	20	1		1			3			4			30
13	1841 ～ 1850		13	1					6			9		1	30
14	1851 ～ 1860	1	19	1					6			2		2	31
15	1861 ～ 1870	1	18		1							7		1	28
16	1871 ～ 1878		9				1		1			3		2	16
17	年代不明		1												1
合計		16	359	7	1	1	2	1	35	1	1	58	1	7	490

史料　『高野山慈眼院入衆帳』（高野山高室院所蔵文書）

第6表　江戸時代慈眼院の檀那場（武蔵国・相模国）の村数

国名	郡名	檀那場の村数	総村数	%
武蔵	多摩	181	367	49.3
	久良岐	9	53	17.0
	都筑	8	75	10.7
	橘樹	10	124	8.1
	小計	208	619	33.6

注　『武州登山帳』（慈眼院）玉郡・橘樹郡・久良岐郡・都筑郡

国名	郡名	檀那場の村数	総村数	%
相模	足柄上	12	95	12.6
	足柄下	1	92	1.1
	淘綾	2	20	10.0
	大住	15	127	11.8
	愛甲	24	47	51.1
	津久井	27	27	100.0
	高座	88	118	74.6
	鎌倉	75	88	85.2
	三浦	3	76	3.9
	小計	247	690	35.8

	合計	455	1309	34.8

注　総村数は元禄15年（1702）『元禄郷帳』の数字による
『慈眼院登山帳』（『寒川町史調査報告書』6）

第7表　相模国四郡から慈眼院へ宿泊した年代と人数

西暦	津久井郡	愛甲郡	高座郡	鎌倉郡	合計	略年表
1711 ～ 1720	286	107	556	216	1,165	1710年慈眼院焼失
1721 ～ 1730	143	67	261	140	611	1721年分地制限令
1731 ～ 1740	197	70	218	143	628	1732年享保の飢饉 1735年弘法大師900回遠忌
1741 ～ 1750	311	129	309	114	863	
1751 ～ 1760	283	72	298	120	773	宝暦年間(1751～1763)常陸国相馬郡新四国八十八か所霊場新設(取手市・柏市他)
1761 ～ 1770	336	112	240	84	772	
1771 ～ 1780	440	87	281	172	980	1771年おかげ参り
1781 ～ 1790	318	151	280	111	860	1783年天明の飢饉 1785年弘法大師950回遠忌
1791 ～ 1800	665	107	322	209	1,303	
1801 ～ 1810	493	223	409	244	1,369	
1811 ～ 1820	332	192	340	105	969	1820～21年準相模88か所新設 1藤沢宿感応院～88鵠沼普門寺
1821 ～ 1830	470	91	471	253	1,285	1830年御かげ参り大流行
1831 ～ 1840	169	60	160	72	461	1832～38年天保の飢饉 1835年弘法大師1000回遠忌
1841 ～ 1850	345	133	411	198	1,087	
1851 ～ 1860	192	76	185	113	566	1853年ペリー来航
1861 ～ 1867	31	9	64	16	120	1864年四国艦隊下関攻撃 1867年ええじゃないか運動
不記	64	253	696	300	1,313	
合計	5,075	1,939	5,501	2,610	15,125	

参考文献　　「相模国慈眼院登山帳」『寒川町史調査報告書』6

資料　二

嘉永三（一八五〇）戌年　正月吉祥日

祠堂料定

一、金貳拾五両　終日六座執行　土砂加持料

一、同貳拾両　大日牌料

一、同　貳両　中日牌料

一、同　壱両　小日牌料

一、同　弐分（歩）　大月牌料

一、同　壱歩　月牌料

一、同　弐朱　茶牌料

一、青銅百拾銅（文）　水向塔婆料

以上

注

①金の単位は四進法ですから一両は四歩、一歩は四朱

②江戸中期の換算率は金一両＝銀六〇匁＝銭六貫文＝米一石

しかし時期により米価が上昇する事もあり、あくまで目安です。

第8表　鵠沼村　普門寺の弟子高野山慈眼院入衆の僧侶

	僧侶名	入山年	西暦	退山年	西暦	入山年齢
1	（普門寺僧）	享保　8.2.22	1723			
2	（普門寺僧）	享保　19.3.12	1734			
3	（普門寺僧）	寛保　3.6.10	1743			
4	（普門寺僧）	安永　2.3.19	1773			
5	（普門寺僧）	安永　6.3.19	1780			
6	芳言房（現住）	天明　4.3.18	1784			
7	晴山（現住）	天明　7.9.12	1787			
8	謙応坊（弟子）	天保　11.4.20	1840			
9	俊英謙雄房	天保　11.6.12	1840	安政　3.4.27	1856	21
10	浄興快厳房	弘化　2.10.5	1845	安政　6.4	1859	21
11	誠応寛潤房	嘉永　5.3.12	1852	安政　3.4.27	1856	21
12	浄耕亮厳房	安政　6.4.5	1859			21
13	（普門寺僧）	慶応　3.8.13	1867			
14	照如厳房	明治　7.9.12	1874			21

参考文献　「慈眼院入衆僧名帳」　高野山高室院所蔵文書
「慈眼院登山帳」　高野山高室院所蔵文書

資料　三

鵠沼村

○宿　文　　藤沢末　上通　　普門寺

当院先住宥実金十五両

燈油料　寄附

布施願　　定右衛門殿

（付札）金七両寄附・門前燈籠施主　浅場太郎右衛門殿

木札二尺交付

木札一八　　名主　小林三左衛門殿

組頭衆五人

組下八拾軒名主へ札頼人馬申受

江川願

木札一八　　関根傳左衛門殿

同　一八　　名主　斎藤六左衛門殿

名□一八　　山上八右衛門殿

組頭衆五人

丑年御札二百四拾前

組下百弐拾軒両名主江札頼置、但し当組は

「百軒普門寺檀那」、その余者一向宗ニ而多く札受不申候

木札　　山伏　　毘沙門堂

（付札）　　組頭　武内八右衛門

同　葉柴九兵衛

同　渡辺勘右衛門

同　鈴木清右衛門

同　上村利右衛門

同　同　権左衛門

新地　　郷右衛門

（高野山慈眼院文書）

第9表　伊勢参宮道中日記にみる見物・宿泊地　　文政11年（1828）

月	日	主な見物場所	宿泊地	宿泊先	宿賃銭
1	15	羽鳥村出発	小田原宿	由左衛門	
1	16	箱根権現・三島明神	沼津	虎屋与右衛門	
1	17		蒲原宿	まきや	
1	18		駿府	中菊屋	
1	19	駿河浅間社	金谷宿	松屋	
1	20		戸倉	大田屋	
1	21	秋葉山	大野	山形屋与兵衛	
1	22	鳳来寺・豊川稲荷	大野	山形屋与兵衛	
1	23		赤坂宿	輪違屋	
1	24	八橋山無量寺	池鯉鮒	木綿屋嘉七	
1	25	池鯉鮒明神・熱田明神・名古屋城	佐屋	えびすや藤八	
1	26	桑名城	四日市	本陣清松	
1	27	白子観音	津	若狭屋六右衛門	
1	28	安濃津観音	（新茶屋）	秋田屋浅右衛門	
1	29		伊勢	一ノ木神主	410
1	30	太々神楽見物	伊勢	一ノ木神主	410
2	1	伊勢外宮・伊勢内宮・朝熊山・古市踊見物	伊勢	一ノ木神主	410
2	2	休息日	伊勢	一ノ木神主	410
2	3		六軒	みの屋本陣	
2	4		垣内	大和屋源左衛門	132
2	5		長谷	山城屋藤七	
2	6	**⑧番**長谷観音・三輪明神	奈良	池田屋庄左衛門	200
2	7	春日明神・大仏・二月堂・能見物	奈良	小刀屋善助	
2	8	法華寺・西大寺・菅原天神・唐招提寺・西ノ京・法隆寺・龍田明神・達磨寺	法隆寺門前	玉屋徳兵衛	150
2	9	当麻寺・安倍文殊院・多武峰・飛鳥坐明神・橘寺・**⑦番**岡寺	多武峰	木屋五兵衛	150
2	10	吉野蔵王権現・吉水院	吉野	海老屋六蔵	150
2	**11**	**（近親者菩提供養）**	**高野山**	**慈眼院**	**500**
2	**12**	**高野山奥の院・大塔・金堂**	志賀	井筒屋源兵衛	130
2	13	**③番**粉河寺	和歌山	伊丹屋吉兵衛	200
2	14	**②番**紀三井寺・玉津島神社・東照宮・五百羅漢・根上り松	和歌山	伊丹屋吉兵衛	200
2	15	淡島大明神		正木屋小右衛門	164
2	16	加太より船に乗る（海上13里）	撫養岡崎村	桶屋彌五郎	150
2	17	***1番***霊山寺・***2番***極楽寺・***3番***金泉寺 白鳥大明神	白鳥	屋葺屋徳兵衛	150
2	18	霊芝寺・***86番***志度寺・真覚寺・壇ノ浦	高松	稲津屋九郎兵衛	200
2	19		金毘羅	児島屋源二郎	
2	20	金比羅山・***75番***善通寺・***71番***彌谷寺 ***84番***屋島寺・***77番***道隆寺・丸亀城	丸亀	備前屋東蔵	200
2	21	丸亀から室津へ船に乗る、与島に着船		船中泊	
2	22	田ノ口湊に着船、喩伽山参詣、塩飽経由室津に着船	室津	伊予屋平九郎	120
2	23	曽根天神	曽根天神門前	江戸屋彦兵衛	150
2	24	高砂・尾上参詣、別府の松	大久保宿	丸屋治右衛門	150
2	25	柿本人麻呂社・須磨寺・生田大明神	摩耶山麓	日野屋五兵衛	132
2	26	摩耶山・灘にて造り酒屋見物・西宮大神宮	大坂七堀橋	平野屋佐吉	463

月	日	主な見物場所	宿泊地	宿泊先	宿賃銭
2	27	道頓堀大芝居見物	大坂七堀橋	平野屋佐吉	463
2	28	四天王寺・茶臼山・堺	大坂七堀橋	平野屋佐吉	463
2	29	大坂所々見物、昼より休息		淀川夜船中泊	339
3	1	石清水八幡・宇治平等院・興聖寺・黄檗山・伏見稲荷・三十三間堂・方広寺大仏	三条	津ノ国屋忠兵衛	255
3	2	洛中・御所・北野見物	三条	津ノ国屋忠兵衛	255
3	3	御所鶏合	三条	津ノ国屋忠兵衛	255
3	4	京都所々見物、買い物	三条	津ノ国屋忠兵衛	255
3	5	津ノ国屋で藤沢平野新蔵と会う⑭番三井寺	大津	松葉屋清兵衛	200
3	6	⑬番石山寺・所々見物、木曾行きの者とわかれる	石部宿	油屋文七	200
3	7		関宿	鶴屋吉兵衛	200
3	8	石薬師	桑名宿	京屋七兵衛	200
3	9		池鯉鮒	水本屋	200
3	10		吉田宿	升屋庄七	200
3	11		浜松宿	帯屋七郎右衛門	200
3	12		掛川宿	捻金屋	200
3	13		岡部宿	小松屋与市	200
3	14		興津宿	大黒屋儀左衛門	200
3	15		原	若狭屋久兵衛	200
3	16		箱根芦の湯	松坂屋	
3	17	宮下奈良屋入湯、曲がり物買い物	箱根木賀	亀屋	200
3	18		小田原宿	小清水屋伊兵衛	200
3	19	帰宅			

参考文献　『伊勢参宮紀行・道中日記』（藤沢市史料集28）　藤沢市文書館

文政11年の旅行者は相模国高座郡羽鳥村　三觜八郎右衛門
（小太郎）　　全行程64日間

主な支出先	（銭　文）	
伊勢	3,054	（御札　143）
高野山	7,544	（供養料　6400）
金毘羅山	1,081	
大坂	4,594	
京都	8,606	（土産代5250）

注　○番号は西国三十三観音霊場
　　イタリツク文字は四国八十八か所霊場

＊折り込みの「伊勢参宮道中日記にみる見物・宿泊地」地図参照

事業報告

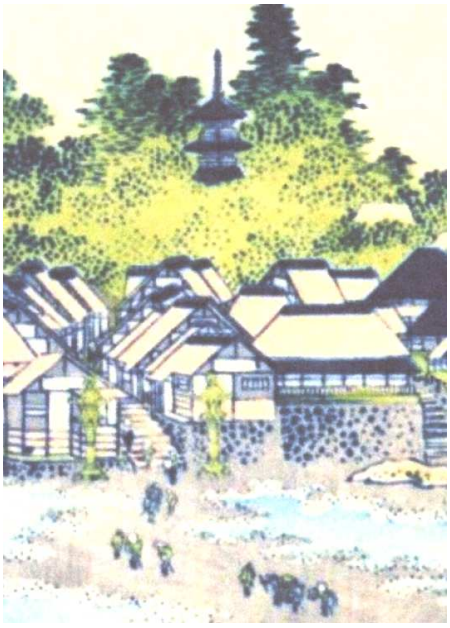
鵠沼地区公民館まつり「鵠沼を語る会」展示

―2018 年 10 月 20-21 日　第３談話室―

公民館まつり展示チーム

今年も公民館まつりの季節になった。わが「鵠沼を語る会」の展示も恒例となって毎回見ごたえのある企画で参加して来た。

今年は､『江の島に三重塔があったのをご存知でしたか』というテーマで展示を行った。そのテーマ決定から展示終了までの経過は以下の通りである。



浮世絵に描かれた三重塔の部分図(北斎)

◆展示テーマが決まった経緯

会誌『鵠沼』116 号掲載の「浮世絵に見る江の島三重塔」(岡田会員著) をアレンジすることで８月 14 日の例会にて決定。28 日の運営委員会で『江の島に三重塔があったことをご存知でしたか』という表題に決定。

◆展示物の作成

例年通りパネル４枚のスペース(左右 7.4m　天地 1.2m)に展示。この条件で、会誌 116 号から内藤会員が浮世絵や絵地図の拡大印刷、説明文の作成を担当。台紙にするラシャ紙（オリーブ色・全紙 10 枚）は笠羽会員が世界堂で購入。

10 月 9 日の例会で机の上に展示物をすべて並べて、出席会員全員で検討。

10 月 10 日、展示物の修正、補正、補足。岡田会員

10 月 11、12 日、岡田会員宅に、佐藤和子会員、守谷会員、笠羽会員、渡部かほり会員が集合、展示物を台紙に貼り付ける作業をする。

◆展示作業

10 月 18 日、竹内会員、佐藤和子会員、岡田会員で行う。

◆まつり期間中の当番

10 月 20 日（土）午前：佐藤和子会員　　午後：神谷会員

10 月 21 日（日）午前：小池会員　　午後：笠羽会員、原会員

◆行政からの主な来場者

鈴木恒夫藤沢市長、平岩多恵子教育長（前鵠沼市民センター長・鵠沼公民館長）

◆撤去作業

10 月 21 日午後 3 時、守谷会員、神谷会員、笠羽会員、原会員、岡田会員

◎公民館まつり全体の当会よりの手伝い

◆展示パネル設営　10 月 17 日:守谷会員、笠羽会員が参加。

◆展示パネル撤去　10 月 22 日:守谷会員、小池会員

◎補足

◆会期中机上に、会誌「鵠沼」のバックナンバーを並べ参照に供した。

展示物をどう並べるかに頭を悩ます検討会

◎来場者の感想

＊　*江の島に三重塔があったとは、はじめて知った…大多数の人*

＊　*杉山検校と江の島道標は知っていたが三重塔建立は知らなかった*

＊　*三重塔が壊されたのは残念だ*

＊　*よくこれだけの資料を集めましたね*

（記：公民館まつり展示担当・小池清志）

来場者の多くの方が、江の島に三重塔があったことを知らなかった

レディオ湘南「ハミング藤沢」の取材を受ける

11 月例会（11 月 13 日）で、レディオ湘南の藤沢市広報番組「ハミング藤沢」内「サークル紹介コーナー」の取材を受けました。

レポーターの高見真希さんが、まず有田裕一会長に「鵠沼を語る会」はどのような活動をしているのかとマイクを向けインタビューが始まりました。会長からは昭和 50 年の発足時のことから 40 年以上に亘る会の主だった活動のことが話されました。この会は鵠沼大好き人間の集まりであり、かつて鵠沼に居住あるいは逗留していた文人、画家など有名人をとり上げ、それらをテーマに皆で話し合い、調べたことを会誌に載せてきているなど活動内容を具体的に説明していました。

続いて佐藤和子、渡部かほり、小池清志各会員に、鵠沼を語る会に入った切っ掛け、入ってよかったと思うこと、鵠沼の好きなところは？　と多岐に亘る質問があり皆さん鵠沼への思いをしっかり込めて話をされ、レポーターの方も思わず話に引き込まれている様子でした。

取材は 50 分ほどで、30 分番組に編集されたものが 12 月 13 日に前半、14 日に後半と２回に亘り放送されました。聞き逃した方は、レディオ湘南から届いた録音ＣＤを一度聞いてみてください。（弥）

山中湖からクゲヌマランのお話を

処々山中湖の錦に色取られた紅葉が十日間ほどのクライマックスで、自然界のファンファーレを告げ、人々は満ち足りた幸せな心持ちに浸かっていると交響曲「秋」が音も無く始まります。唐松が秋の陽射しと競い合って金色の針を降らせるのです。

ここまでは山中湖だよりです。そしてこれからが、くげぬまを語ります。

友人の半数は花の友です。富士山周りの花ばかりか、ご夫妻で北海道最北端、礼文島のアツモリソウ原生地を訪ねるツアーでの出来事を話してくださいました。

アツモリソウをはじめ様々な草花の中から、ギンランをみつけ「ギンランだ！」と御夫人が声をあげました。ガイドの女性が即刻「違います。ギンランではありません。クゲヌマランです」ときっぱり打ち消され、花通（はなつう）としてはショックだったようです。

帰宅してから調べ納得した、という話です。（ｋｍ生）

村娘座像

この秋、Ｙ氏コレクションから岸田劉生画『村娘座像』（水彩）がオークションに出され、１億８千万円で落札されたというニュースが新聞に載った。落札予想は６千万から１億２千万円だったそうだから、５割増しの高値がついたことになる。モデルをつとめたお松さん（当時８歳）が聞いたら、卒倒するだろう。

この絵は大正９年３月 14 日に描き上がった。当日の劉生日記には「十時過ぎより昨日の続きの村娘座像にかかり、一時間ほどで仕上げる。すぐまた小さい紙に村娘の肖像を始め、二時頃これも仕上げる。二枚ともよく行きたる様なり」と劉生も出来映えに満足した傑作である。この絵のサイズは縦 50.5 センチ、横 34 センチ。２枚のうち前日から取り掛かった大きい方である。

展覧会への出品歴は 1961 年「33 周忌展」1976 年「没後 50 年展」など多数というが、私は原画を見たことがない。近年は全く公開されていなかったように思う。

新所有者は、秘蔵せず、展覧会などで開示して、我々に鑑賞する機会を与えて欲しいものである。(T.0)

作家春秋 ②

森岡　澄（会員）

清水三十六（山本周五郎）と井口長治（山手樹一郎）

「なりわいや　落ち葉の音も　夜もすがら」

清水三十六（山本周五郎）と四歳年上の井口長治（山手樹一郎）との間には、長い付合いがあった。

昭和の始め清水は暮しのため井口の編集する少年雑誌『譚海』に毎日のように二、三本の小説を書いて持ち込んで買ってもらっていた。同じ筆名では困るのでメインの山本周五郎の他に俵屋宗八を名乗ったが、三編一緒のときは三つのペンネームが必要になった。

その頃、東京の環状線として山手線が全区間開通したことがあって、井口が「山手線一郎」ではどうか？　と提案した。

清水は、いくら何でも少々ふざけ過ぎではないか？……　それなら一字だけ変えて「山手樹一郎」と修正することで決まった。

山手樹一郎の筆名はその後、名付け親の井口の許に戻った。井口が『サンデー毎日』の大衆文藝選に応募するとき、とりあえず筆名が必要になり、かつて山本周五郎の別名として付けた山手樹一郎を返還してもらうことにした。

この時以来、井口は自分の筆名に山手樹一郎を、清水は山本周五郎、一本で通すことになった。

昭和十四年の秋、山手は数え年四十になったのを機に十二年勤めた博文館を退職し、筆一本の生活に入った。周五郎はつぎの一句を山手に贈った。

「なりわいや　落ち葉の音も　夜もすがら」

山本は平素から会社を辞めないでいる山手に向って「生活に困らなくて、いい家庭があって、それでいい小説を書くなんていうのは、虫がよすぎる」と繰り返していた。

腰を抜かしていた亀井勝一郎

昭和十五年七月頃、井伏鱒二は年下の亀井勝一郎を誘って、伊豆の谷津温泉へでかけ、そこへ折から湯ヶ野に滞在中の太宰治が美知子夫人を連れてやってきた。三人で、河津川で釣をした。

その晩、大雨を伴う台風に見舞われた。真夜中すぎ宿の女主人が「水だ　水だ―」とけたたましく触れ回り、「皆さん、二階に避難して下さい!!　二階です―」と金切り声をあげた。

井伏はリュックサックを持って階段を駆け上がると障子をあけひろげた部屋に、亀井勝一郎が蒲団を積み重ねて腰をかけ凝然（ぎょうぜん）として天の一角を睨んでいた。

さすがに学生の頃、共産党に入党し獄中生活をしただけあって大洪水にもびくともしない、と井伏は感心した。

まもなく大宰夫妻もやって来た。太宰はもう死ぬ覚悟で「人間は死ぬときが大事だ！」と云って、夫人に向って「あのネ―　失礼してズロースをはきなさい。死ぬときが大事です」と云った。

妻はうつむくばかりで、ふだんと同じようにきちんとかしこまっていた。太宰は角帯をしめ白足袋をはいていた。皆は床下浸水ですんだ峰温泉の宿へ移った。

のちの亀井の話では、洪水が怖ろしくて蒲団に尻餅をつき、観音経を唱えようとしたが冒頭の文句が思い出せない。途中の文句から声に出していると、やっと冒頭の文句が浮かんだ。

太宰はそれを聞くと、亀井のやつ腰を抜かしていたのだ、と笑った。

（もりおか　きよし）

＜編集担当より＞
第 116 号　表紙目次の≪作家春秋≫ ① 宇野千代・今東光 『藪』とあるのは『葱』の誤りでした。訂正し筆者並びに読者の方にお詫びいたします。

今井達夫 落穂ひろい②

鵠沼と三田派

今井 達夫

話はすこし古くなるが、戦争末昭和十九年のことだ。この藤沢地区でも第二国民兵訓練召集というのがあって頭を五分刈りにして参加しろという令状がやって来た。第二国民兵というのは徴兵検査で丙種合格になった連中のことだが、そんな話はどうでもいい。年を喰った私たちが藤沢小学校校庭で全国二番目にきびしいという訓練をうけ、その休憩時間に仲間だけでおしゃべりをしていると、

「そのハツタカといウィスキイならうちにもありますよ。よかったら帰りに寄りませんか、ご馳走しましょう」

と、割りこんで来た男があった。これが加藤謙蔵だったのである。加藤が自己紹介したところによると、

「僕は石坂洋二郎君と同級でしてね、沢木四方吉先生についていたのですが、結局建築設計に興味を持つようになって、鎌倉の沢木先生のお宅の設計は僕がやったのですよ」

それならば私の先輩になる。その日はそのまま別れた私は両三日のち彼を訪問したが、その家は彼自身の設計によるという三階建てで、家中案内してくれたその二階の客間に飾ってあった二枚折りの屏風が私の目を惹いた。与謝野寛、晶子夫妻の色紙やら短冊などが貼りまぜてあったのである。足をとめた私に加藤は微笑を含んで説明をしてくれた。

「僕の家内は与謝野家の長女なんですよ」

この説明も私を驚かしたが、彼は建築設計に移ったけれども文学との縁を切ったのではなく、その数年前「仔鹿物語（イヤリング）」の翻訳を上梓していたのである。彼は終戦後両三年で死去したので私は縁がうすかったが、そして鎌倉の沢木邸も見ずじまいだが、沢木先生とは大正時代の慶應文学部の教授であり「三田文学」の主幹だったペンネーム梢、本名四方吉氏のことである。

ここで話はさらに古くなる。私が三田の予科生になったのは大正九年だが、そ

の秋のある日、教室で小島政二郎先生から

「君、鵠沼だってね。沢木先生の療養用の家を探しているんだが、鵠沼に無いだろうか」

という言葉をうけた。予科生の私にとっては沢木先生の名前きり知らない時期だったが、クラス受持ちの小島先生からそんな相談をうけた光栄にわくわくしながら知恵をしぼった。しかし、知恵をしぼったにしては失礼な仕業をやってしまったものだと、あとで冷や汗を流さなければならなかった。というのは、鵠沼から三田へかようのを嫌って外交官である伯父の渋谷の留守宅に住み込んでいたせいもあるが、鵠沼の東屋旅館のお上さんに名刺で紹介してしまったのである。しかし、小島先生は私を咎めなかったばかりか、次週の国語の時間に

「ありがとうよ。おかげで沢木先生のお宅がみつかったよ。君の紹介してくれたお上さんてェ人は親切な人だね。こっちのいうことをようく呑みこんでくれてね」

小島先生から懇篤なお礼をいわれて私は恐縮するばかりだったが、お役に立ったのを得意になったりしたのだから幼稚きわまるハイティーンだったと、思い出すたびに赧くなる。しかし、そのお上さんが先年物故した長谷川路可の母堂だったといえば、そして長逗留をして新聞小説を書いたりしていた久米正雄氏などを上手に扱っていたと説明をつけ加えれば、沢木、小島両先生の名前について知識があっても不思議はなかろう。尚、ついでに説明すれば、長谷川路可氏は長くイタリイに滞在してその寺院に壁画を描き、菊池寛賞をもらった大和絵画家である。カトリック教徒である彼は私より年長だが、戦前から飲み友達になっていた仲だ。

どうも話が横道にそれてしまった。沢木四方吉先生にもどろう。しかし、私は先生とはとうとう逢わずじまいであった。休暇になれば鵠沼へ帰って来るくせに、一度も先生のお宅にお邪魔したことがないのである。そういう機会があったにもかかわらず、それを見送ってしまったのを、今さらではあるが残念にくやんでいる私である。その機会というのを説明しておこう。

その翌年の春の休暇中のことだったと思う。私が自宅から江の電の鵠沼停留場へ向かって歩いて行くと、向うから二人づれの和服姿の男がぶらぶらと散歩の恰好でやって来るのが見えた。現在でも割に人通りのすくないその大通りだが、そのころはもっと閑静な道で、ほかに人影がなかった。近づいてみると、その二人づれが小島政二郎、井汲清治の両先生であることを認めた私は、思いがけない出合いにめんくらってちょっとしどろもどろになった。しどろもどろになった理由

は、ご両人ともそれぞれ新進作家であり新進評論家であったことが眩しかったからである。その大正十年ころはそういう人たちを尊敬する心持の深い時代であった。

慌てて帽子を取ってお辞儀をすると

「やあ、君、きょうはこっち？　ああ、そうか、春休みだったね。僕たち沢木先生をお訪ねするんだよ」

そう説明してくれたのは、もちろん小島先生であった。井汲先生には教室でフランス語を教わり顔馴染みではあったが、個人的にはまだ親しくなっていない時期だったのである。その井汲先生の方は私に向って微笑の顔を向けただけだったが、このときどうして沢木四方吉氏訪問の同行を求めなかったか、あんまり年少の故だったからと思いかえすより仕方のない私でしかないのである。言葉少なに別れを告げた私は、両先生のうしろ姿をしばらく立ったまま見送っていた。別に洒落ではない。文字通りうしろ姿とともに遠ざかって行く機会を同時に見送っていたのである。

そのころの鵠沼海岸地区は小松林つづきで、まっすぐの道には春の砂が白く光っていた。両先生のうしろ姿はゆっくりと遠ざかって行く。考えてみると、私は十七歳になったばかりだったから、両先生ともまだ二十代の半ばを越したばかりだったに違いない。先生という存在は生徒にとっておとなに見えすぎるものである。

その日沢木邸でどんな会話が交わされたか私は知らない。その後そう機会はなく、私は単独で訪問する勇気も起さないうちに、関東大震災というのにおそわれて私の家は全潰、東京へ居を移すことになったからである。いや、沢木四方吉氏がいつ鎌倉に家を新築引越されたかも知らなかった私は、その後水上滝太郎氏の「貝殻追放」中の一文で、その震災後鎌倉で逢った事実を知ったのみである。沢木氏の鵠沼在住期間はきわめて短かったと推定していいようだ。話はまた横道にそれるが、その旧沢木邸に大正十五年から昭和二年にかけて住んだのが自殺直前の芥川龍之介氏であった。三田派と直接関係がないじゃないかと文句をつける向きには、しばらく待っていただきたいという。

大正十五年大森馬込の住人になっていた私は、その夏稲村ケ崎に避暑したが、ある日鵠沼を訪れ、海水安全プールというところで芥川龍之介氏に逢う機会を持った。そのころ鵠沼住人だった金子保画伯の紹介によったのである。海辺のそのプールのそばに画架を立てていた金子画伯は、以前芥川、久米、菊池など「新思

潮」の表紙を描いたひとで、私の中学時代の絵の先生である。芥川邸から一キロほどきりはなれていない場所に住んでいた彼は、芥川氏についてこんなことを話してくれた。

「彼は弱っているね。肉体的に。手首なんかひと握りもないほどだぜ。うちへ遊びに来るときだって、これっぽっちの道のりだのに人力に乗ってやって来るんだからね」

芥川の腕の細さは、そのとき私も目をそむけずにいられないほどだったが。これが自殺前年夏の彼の状態であった。

ここで話は突然戦後両三年に飛ぶ。ある日路上で不意に挨拶をうけてめんくらったことがある。ほかに誰もいない松林のあいだの道だから、私に向ってのそれであることは即座にわかったし、相手の顔には十分見おぼえがあった。私は慌てて挨拶を返したが、このひとが芥川比呂志君だったのである。彼が戦地から帰ったばかりであることは知っていた私だが、三田でははるか後輩である彼と、今まで挨拶を交わしたことがなかったから、咄嗟には言葉が出て来なかった。彼が住んでいるのは鵠沼西海岸ともいうべき場所で、彼といとこの葛巻義敏氏と同居していた時期である。その後間もなく東京へ移った彼と鵠沼で顔を合わせたのはそのとき一度だけだったが、この路上の偶会はどんな印象を残したろうか。その後逢う機会があっても訊いてみる気分にはならなかった。強いていえば、戦後の人なつかしい時期のもたらした結果であろうか。

文学座の芥川比呂志に登場してもらったからには、俳優座の方も逃すわけには行かない。昭和十年ごろ田中千禾夫、澄江夫妻が鵠沼に住んでいたのを知らなかったのは不覚というより仕方がない。田中千禾夫は大正末期私たちのやった同人雑誌「橡（つるばみ）」に引っ張り込んだという間柄であるばかりでなく、そのころちょっとのあいだにしろ鵠沼に来ていたことのある私だったからである。彼が住んでいたのは、大正四年「その妹」をそこで書いた武者小路実篤氏の家の近所であったことがわかったのは戦後のことであった。

そういえば慶應で彼と同級だった映画監督の原研吉も同じ藤沢市内の片瀬に長く住んでいたが、同じく映画畑の狩谷太郎もこれは鵠沼住人であった。両君とも故人になってしまったが、狩谷太郎の方は予科一年からの私の同級生である。彼は戦争末期に松竹大船撮影所の所長になったが

「すこし早すぎたよ。時期がわるいしね」

所長就任を祝った私たちに嘘でない顔色で眉をひそめてみせたものだが、映画人らしい頭の回転のはやさで先を読んでいたのかも知れない。戦後そのポストの故で追放令に引っかかった不運に見舞われたのである。

同級生といえばもうひとり忘れることのできない人物がいる。関東大震災の日、東京神田の路上にいた私は、その晩は渋谷の伯父宅に一泊、翌日はいろいろ情報をあつめているうちにおそくなり、大井町の友人宅の厄介になって、鵠沼へ帰り着いたのは三日の深更であった。前記の通り家の全潰した私の家では、母や妹たちは近所の屋根がかるいため歪んだだけですんだ貸別荘に避難していたが、その家に辿りついた私は、最悪の状態を覚悟していただけに、むしろ気落ちがしたほどであった。そんな心持のおかげだったろう、翌朝どこかの地方新聞に出ていた江の島海中に陥没という大見出しの記事を見ると、たちまち野次馬根性を呼び起こされて、海岸へ駆け出したものである。御承知のようにラジオのまだなかった時期だったし、東京の新聞は発行不可能の状態、よくぞ地方の新聞を取寄せ配達してくれたものだと感謝したが。

ところが江の島は健在であった。私はまたしても気落ちをおぼえたのだが、その人気のない海岸でふと顔を合わせたのが、その同級生だったのである。教室ではほとんど口を利いたことのなかった同級生だったが、しかも彼が鵠沼に来ているとは全然知らなかったくらいつきあいの薄い人物だったが、そのときは不意に親愛感を誘い出され、たがいの無事を祝し合った。江の島陥没のデマを笑い合ったり、随分長話をしてしまったが、そのときはもちろん知っていた彼の姓名が、その後どうしても思い出せないのである。もし読者諸兄のうちに心当たりの方があったら、とは虫のいい尋ね人の文章になってしまったが、ご一報いただければ幸甚である。

（いまい　たつお）

編集注：「三田評論」第 726 号　昭和 48（1973）年 5 月号より転載

新田開発

渡部 瞭

初期新田開発（第 0074 話）

『新編相模國風土記稿』に「今御料の地は延宝六年八月、成瀬五左衛門検地す。外に新田三所あり、其の一は享保七年墾闢（こんべき）し、日野小左衛門改め、其の二は宝暦七年の墾闢にして志村多宮検地す。其の余は布施孫之進の采地にして、延宝七年一一月先祖孫兵衛検地し、其の後開墾の地あり、元文元年以来新田知行となる。村内空乗寺領九石交れり」とある。

これらは検地の記録であって、それぞれの新田がいつどこで開発されたかについては記されていない。

有賀密夫氏の調査により、初期の新田開発については、大庭折戸村の川嶋家の文書に「相州鵠沼普請、拾九年以前未年、取立申候ニ付」とあり、明暦元年未年に布施氏知行地に鵠沼新田が完成したことが突き止められた。同書には、用水堀開鑿（かいさく）潰れ地の替地につき、鵠沼村領主が村役人に手形を発行したことも記されている。

鵠沼村の東西には、境川（片瀬川）と引地川が流れているが、新田開発用地として残されている土地は河川から離れ、標高も高い砂丘地であるため、村内の河川から直接引水することもできなかったし、川名村や片瀬村のように谷戸に溜め池を造れるような地形でもなかった。しかも保水力のない砂地である。

従って、農業用水を得ようとすれば、水車を設置するか両河川の上流部に取水堰を設けて引水するしかない。

上記の川嶋家の文書に「1672（寛文 12）年、鵠沼村布施領・大橋領の名主ら、大庭村の引地川に新田引水用の堰を再建」とある。「再建」だから、その前にも取水堰が建設されたはずだが、その記録は見られない。

他村域に造らせてもらうわけだから、大手を振って「我田引水」というわけには行かない。「出水事故があったら、堰を壊してもいいですよ」というような一札を入れて恐る恐る造らせてもらうのだ。

従って、いくつかの水争いの記録が残っている。鵠沼新田の場合、さらに上流の円行村に造らせてもらったりしているし、最終的には 1713(正徳 3)年に引地川より水車で水を汲み上げ、新田を開きたいとしている。この場合も引地川は羽鳥村との境界を流れているから、相手の村の名主に通知する必要があった。

＜新田とは＞

「新田」と書くと、水田すなわち水稲を栽培するための耕地のように思われるかも知れない。農業用水についていろいろ述べたので、ますますそう思われても仕方がない。

鵠沼新田の場合、砂丘間低湿地のように、よほど地形的に恵まれていない限り、水田開発は行われなかったと思われる。そのほとんどは麦類や雑穀、野菜類を栽培する普通の畑地だったに違いない。

保水力のない洪積台地の相模野や武蔵野の新田開発も同様である。

17 世紀後半から 18 世紀前半に至る鵠沼新田は、現在の鵠沼橘二丁目の旧小字新田に集落があり、耕地はおそらく現在の藤沢駅南部から鵠沼中学校あたりと思われる。

新田を開発した人々は、鵠沼本村すなわち大庭御厨以来の伝統を守る皇大神宮の氏子集落からの出村ではなく、全く別の地域から集められたに違いない。
なぜなら、名主=平本家をはじめ、滝澤、八木、杉浦（2 軒）、関野、吉澤と、本村と共通する姓がないからである。

鵠沼地区新田関係年表

西暦	和暦	月	日	記　事
1655	明暦 1	4	2	布施氏知行地に鵠沼新田完成
1672	寛文 1			鵠沼村布施領・大橋領の名主ら、大庭村の引地川に新田引水用の堰を再建
1673	寛文 13	4		鵠沼村・大庭村間の水論。大庭村が奉行所へ返答書を提出(鵠沼新田の用水堰切開に関して)
1683	天和 3	4	5	鵠沼新田(市郎左衛門)開発の後、用水堀の件で円行村(八郎左衛門)と争論起こる

1695 元禄 8　3　3　鵠沼新田名主=(平本)伊右衛門(眞如院日實　俗名権兵衛)、没[平本家墓標]

1697 元禄 10 8　鵠沼新田名主=(平本)伊右衛門の妻(法性院日相信女)、没[妙善寺過去帳]

1704 宝永 1　荒れ地状況、鵠沼村＝7.2%、鵠沼見取新田＝31.2%[相州鎌倉高座郡村々申御年貢割付帳]

1713 正徳 3　12 19　鵠沼村新田、引地川より水車で水を汲み上げ、新田を開きたいと羽鳥村名に通知

1715 正徳 5　9　鵠沼橘 2-13-16 地先鵠沼橘の辻の庚申塔、造立

1732 享保 17　鵠沼新田第1期開闢。代官日野小左衛門改め[新編相模國風土記稿]

1736 元文 1　旗本布施氏知行地の新規開発分、新田知行となる[新編相模國風土記稿]

1742 寛保 2　1　2　新田名主=(平本)「遥照院英徳居士」、没[妙典寺過去帳]

1756 宝暦 6　代官=志村多宮、鵠沼村に新田検地施行

1757 宝暦 7　6　30　新田名主=(平本)「善性院宗悦日眞」(俗名五良兵衛)、没[平本家墓標]

1757 宝暦 7　鵠沼新田第2期開闢。代官志村多宮検地[新編相模國風土記稿]※前年説あり

1773 安永 2　11 吉　鵠沼海岸 7-16-17 地先納屋の双体道祖神像、造立(新田村醒井氏。現在所在不明)

1779 安永 8　9　鵠沼橘 2-14-9 地先の双体道祖神像、造立(現在所在不明)

1830 天保 2　『新編相模國風土記稿』、刊行。元文元年の布施氏新田知行について記す

1836 天保 7　10　代官=江川太郎左衛門英龍、鵠沼村字地蔵袋地先の鉄炮場新田 3 町 4 反 4 畝余を開発

1855 安政 2　10　2　江戸安政大地震(M=7.5 震度 5.9)　藤沢宿も潰家多数。→新田の一部住民、納屋に移住(伝)

1856 安政 3　11 吉　納屋の辻の道祖神塔(双体神像)、造立(遺失盗難？→1971 文字塔再建)

1878 明治 11 12　平本家『鵠沼新田繪圖』制作(長さ=176cm　幅=110cm　和紙上に田・畑・山林別に着色)

1950 昭和 25 8 20　新田宮、知事の認可で皇大神宮の境内社となる

1964 昭和 39　新田宮前の新田道に沿った農業用水路、暗渠化

1971 昭和 46 1 14　鵠沼海岸 7-16-17 地先納屋の道祖神塔(文字塔)、造立

1998 平成 10 2 吉　新田宮賛助会、境内に水神の石碑を造立

［参考文献］有賀密夫「近世の鵠沼村と新田開発」『わが住む里』第 25 号(1992)

後期新田開発(第 0092 話)

＜納屋の新田＞

小田急線鵠沼海岸駅前商店街「マリンロード」を西へ進むと、「高根」バスターミナルの先で郵便ポストのある三叉路になり、直進すると八部公園前から引地川「作橋」を渡る。右に進むと、左にカーブして道祖神の文字塔が置かれた三叉路に至る。ここでぶつかる道が「浜道」と呼ばれる鵠沼村の古道で、本村の人々が地曳き網に通う道であった。

この三叉路は「納屋(なんや、あるいはないや)の辻」といい、明治初期にはこの辻を中心とした 6 軒の民家があり、この集落を「納屋」と呼んでいた(現在は町内会「堀川郷友会」に属している)。

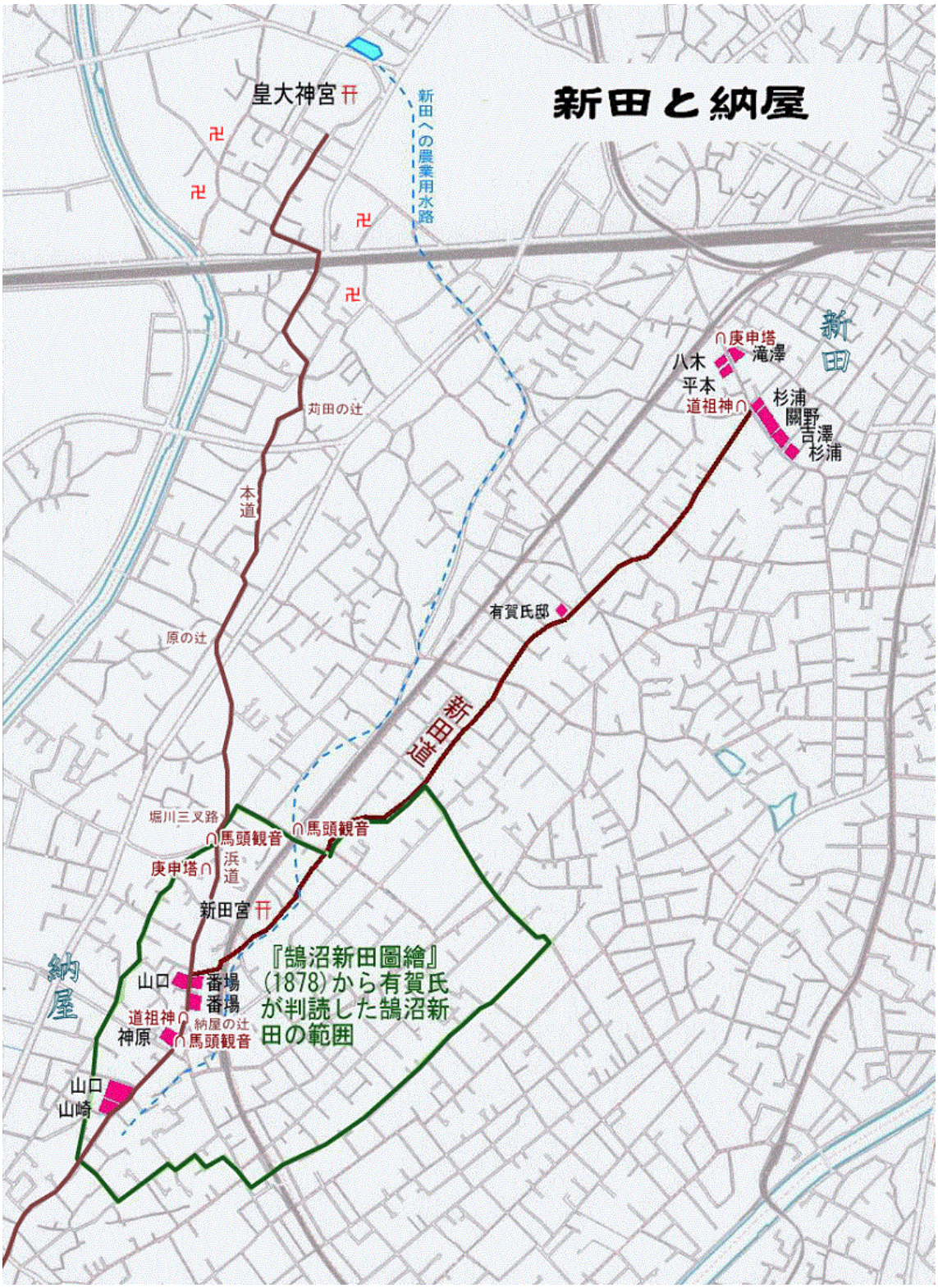
「納屋」というと、集落地理学を学んだ方ならば、千葉県九十九里平野の「納屋(なや)集落」を想起されるだろう。九十九里平野では海岸から 4km 程度内陸に本村があり、2km 程度の所に新田集落があり、数百㍍程度の所に納屋集落がある。これが見事にいくつも並んで分布しているのである。本村の名前が「○○」ならば、新田集落は「○○新田」、納屋集落の名は「○○納屋」という具合に、同一名称が使われている。納屋集落は、本村や新田の人々が地曳き網用の漁具を置いておく納屋に、やがて定住するようになったと考えられている。

鵠沼の場合は、第 0074 話で述べておいたように、本村の出村として新田が開かれたのではないと考えられる。その根拠として共通する姓が見られないことを挙げておいた。下図で判るように、新田と納屋の場合も共通する姓は見られない。しかし、この両者のつながりは深そうである。

納屋集落の北端で浜道と分かれて北に向かう細道がある。現在は小田急線の自動車の通れない踏切を渡って、「鵠沼松が岡公園」の前に出る。ここから「新田山砂丘列」の西麓を辿って新田集落に続く道となり、これを「新田道」と呼び慣わしてきた。「鵠沼松が岡公園」の先には「新田宮」と称する小社が祀られていて、新田・納屋両集落の人々が管理している(1950 年以来、皇大神宮の境内社となっている)

両集落の人々の間では、「1855(安政 2)年 10 月 2 日の江戸安政大地震(M=7.5 震度 5.9)の際に、新田の一部住民が納屋に移住した」と伝えられている。

先に紹介した納屋の辻の道祖神文字塔は、1971(昭和 46)に建て替えられたもので、それ以前は双体道祖神が祀られていたが、おそらく盗難により遺失した。この双


新田と納屋
皇大神宮
新田への農業用水路
苅田の辻
本道
原の辻
有賀氏邸
新田
庚申塔
滝澤
八木
平本
道祖神
杉浦
關野
吉澤
杉浦
新田郷
堀川三叉路
馬頭観音
馬頭観音
庚申塔
浜道
新田宮
納屋
山口
番場
番場
道祖神
納屋の辻
神原
馬頭観音
山口
山崎
『鵠沼新田圖繪』(1878)から有賀氏が判読した鵠沼新田の範囲

体道祖神は、1773(安永 2)年に新田村醒井氏によって造立された旨彫られていた。従ってこの段階で常住集落が形成されていたと見るべきであろう。

『新編相模國風土記稿』にある「其二所は寶暦七年の開闢(かいてき)にして志村多宮檢地す」とあるのが納屋なのであろう。

有賀密夫氏は、「近世の鵠沼村と新田開発」研究調査の中で、新田の旧名主平本家が 1878(明治 11)年に制作した『鵠沼新田圖繪』により、納屋の新田が現在のどの範囲であったかを判読された。その結果が左図である。この図が平本家によって制作されていたことは納屋が新田の支配下にあったことを物語るのであろう。

鵠沼地区後期新田開発関係年表

西暦	和暦	月 日	記 事
1757	宝暦 7		鵠沼新田第2期開闢。代官志村多宮検地[新編相模國風土記稿] ※前年説あり
1773	安永 2	11 吉	鵠沼海岸 7-16-17 地先納屋の双体道祖神像、造立(新田村醒井氏。現在所不明)
1779	安永 8	9	鵠沼橘 2-14-9 地先の双体道祖神像、造立(現在所在不明)
1830	天保 2		『新編相模國風土記稿』、刊行。元文元年の布施氏新田知行について記す
1836	天保 7	10	代官=江川太郎左衛門英龍、鵠沼村字地蔵袋地先の鉄炮場新田 3 町 4 反 4 畝余を開発
1855	安政 2	10 2	江戸安政大地震(M=7.5 震度 5.9) 藤沢宿も潰家多数。→新田の一部住民、納屋に移住(伝)
1856	安政 3	11 吉	納屋の辻の道祖神塔(双体神像)、造立(遺失盗難？→1971 文字塔再建)
1878	明治 11	12	平本家『鵠沼新田圖繪』制作(長さ=176cm 幅=110cm 和紙上に田・畑・山林別に着色)
1950	昭和 25	8 20	新田宮、知事の認可で皇大神宮の境内社となる
1964	昭和 39		新田宮前の新田道に沿った農業用水路、暗渠化
1971	昭和 46	1 14	鵠沼海岸 7-16-17 地先納屋の道祖神塔(文字塔)、造立
1998	平成 10	2 吉	新田宮賛助会、境内に水神の石碑を造立

［参考文献］有賀密夫「近世の鵠沼村と新田開発」『わが住む里』第 25 号(1992)

（わたなべ　りょう）

＜故渡部瞭会員『鵠沼を巡る千一話』第 0074 話・第 0092 話より＞

「鵠沼を語る会」活動の記録

（平成30年６月～12月）

６月例会

６月12日(火)　　10時～12時　　第１談話室　　17名出席

司会進行　綿谷会員

―会誌『鵠沼』第 116 号配布(印刷:６月４日 製本:６月８日 発行:６月 10 日)

―映像で辿る「むかしの鵠沼村庶民の暮らし」開催の報告

―歴史講座「江戸時代鵠沼村の弘法大師信仰」（講師：圭室文雄氏）について
６月 23 日（土曜日） 1:30～4:00pm　鵠沼市民センターホール にて開催。

＜お話＞古い会誌『鵠沼』に書かれている興味深い事柄を取り上げ、話し合いの題材とする。今回は 55・56 号(平成２年発行)に掲載の「鵠沼の光と影」(その一・その二・その三)を取り上げた。

６月運営委員会

６月 26 日(火)　　10 時～12 時　　第１談話室　　７名出席

７月例会

７ 月 10日 (火)　　10時 ～ 12時　　第１談話室　　15名出席

司会進行　有田会長

―公民館まつり展示について
会誌 116 号に掲載の江戸～明治時代にあった江の島の三重塔を取り上げる。

―６月 23 日に開催された歴史講座「江戸時代鵠沼村の弘法大師信仰」（講師:圭室文雄氏）についての報告。15 ページに及ぶ講座資料を出席できなかった会員を考慮し配付し、講演内容（前半）の収録テープを聴いた。

７月運営委員会

７月31日(火)　　10時 ～ 12時　　第１談話室　　５名出席

８月例会

８月14日(火)　　10時 ～ 12時　　第１談話室　　13名出席

司会進行　有田会長

―公民館まつり展示テーマ決定　『江の島にあった三重塔を知っていますか』

—歴史講座「江戸時代鵠沼村の弘法大師信仰」の講演内容（後半）の録音を聴いた。

—講演録を会誌『鵠沼』第 117 号に掲載。117 号を講演録特集号とする。講演録の活字化は内藤会員が担当、外部の協力者に作業を依頼する。それを基に講演者の圭室文雄先生に加筆･修正をお願いする。

８月運営委員会

８月28日(火)　　10時～12時　　第１談話室　　６名出席

９月例会

９月11日(火)　　10時～12時　　第１談話室　　16名出席

司会進行　有田会長

—公民館まつり（10 月20 日-21 日）の展示方法について話し合った。
最終展示テーマは『江の島に三重塔があったのをご存知でしたか』
材料購入担当、展示作業スケジュールなどを決めた。

—会誌『鵠沼』第117号の原稿〆切を11月末日とする。

—会誌55・56号掲載の「鵠沼の光と影」の続きを題材に話し合った。

９月運営委員会

９月25日(火)　　10時～12時　　第１談話室　　５名出席

—内藤会員作成の江の島の三重塔に関する展示材料を基に、追加する材料を検討。三重塔の位置が分かる地図の作成、江の島の古地図の追加を決めた。

10月例会

10月９日(火)　　10時～12時　　第３談話室　　13名出席

—公民館まつり展示方法を出席者全員で検討。下地に使うラシャ紙をひろげ展示する写真、古地図、テキストなどを置き全体のバランスをみる。
下地に展示材料を貼り付ける前作業、会場での展示作業のスケジュール、作業参加者を決める。さらに会期中の担当者など諸々のことについて決める。
公民館まつり全体の準備に関して当会からの担当者を決める（事業報告参照）

—レディオ湘南より取材依頼を受ける。藤沢市広報番組「ハミング藤沢」内「サークル紹介」コーナーで「鵠沼を語る会」を紹介するための取材。インタビュー形式で 3、４名の会員から話を訊く。放送日は 12 月 13・14 日の２日間。
11 月例会時に取材を受けることにする。

10月運営委員会

10月30日(火)　　10時～12時　　第１談話室　　８名出席

11月例会

11月13日(火)　　10時～12時　　第１談話室　　14名出席

—会誌『鵠沼』第 117 号作成の進捗状況について説明

—明年１月の新年会について

会場は今年同様、「たか亭」とする。会費は￥3,000

2019 年 1 月 22 日（火）11 時 30 分受付け　1 月例会後 12 時～14 時　新年会

≪レディオ湘南の取材≫　10 時 30 分～11 時 20 分

藤沢市広報番組「ハミング藤沢」内「サークル紹介」コーナー（12 月 13 日と 14 日の２回に亘って放送）の取材を受ける。

「鵠沼を語る会」発足時から 40 数年に亘る会の活動について有田会長が具体的に説明。さらに佐藤･渡部･小池各会員が「サークルに入ったきっかけは何ですか？」「入ってよかったなと思う事は？」「鵠沼のお好きなところは？」の質問に、それぞれの思いを込めて話した（*Coffee Break* 参照）

11月運営委員会

11月13日(火)　　10時～12時　　第１談話室　　５名出席

12月例会

12月11日(火)　　10時～12時　　第３談話室　　13名出席

司会進行　綿谷会員

—会誌『鵠沼』第117号の作成スケジュールを説明。12月20日発行。印刷を12月19日、製本は年内に数部、残りは明年１月15日に行う。部数は200部（40部は鵠沼郷土資料展示室用）「準四国相模国八十八ヶ所札所」と「伊勢参宮道中日記にみる見物・宿泊地」各地図（同展示室提供）を会誌に折り込む。

—新年会の参加申込みを受ける。現時点で14名　最終〆切りは明年1月12日

＜お話＞鵠沼郷土資料展示室で開催の『黒崎よし介さん』展を内藤会員の説明で見学した。

12月運営委員会

12月18日(火)　　９時30分～11時　　第２談話室　　６名出席

＜12月現在会員数　43名＞

編集後記

■今年は台風の当たり年で、鵠沼も強烈な南風が吹き荒れ塩害で窓ガラスは曇り草木の枯れが目立ちました。12 月に入って寒暖の差が大きい日々だが、富士山はすっかり冬の装いになり、鵠沼の海が一番いい季節になりました。(弥)

■歴史講座「江戸時代鵠沼村の弘法大師信仰」開催の発端は大東・大師堂の改築を機に、大東地区の人たちが江戸時代に浅場太郎右衛門が設立した「相模国準四国八十八ヶ所」をもっと多くの人たちに知ってほしいと思ったことでした。この思いを藤沢市に伝え郷土歴史課が応じ、鵠沼郷土資料展示室、鵠沼を語る会に協力要請。こうして一連の展示･講座・札所巡りが企画実施されたのです。同展示室では「むかしの鵠沼村の信仰と庶民の暮らし」を展示、さらに「鵠沼地区内 9 カ所弘法大師巡礼ウォーキング」を実施。むかしの鵠沼を知ってもらう上で、今回の企画は功を奏したと思います。10 年前にも圭室文雄氏が鵠沼村庶民の弘法大師信仰をテーマに講演され、その時のお話と資料を基に鵠沼を語る会が「相模国準四国八十八ヶ所」の調査を行いました。会員が調査担当地区に分かれて八十八ヶ所の札所をめぐり、現状を調べ会誌 100 号に掲載。併せて八十八ヶ所めぐりのガイドブックを作成、公民館まつりやその他のイベントでも札所のパネル展示をしました。こうした当会の累積した資料が今回の一連の催しに大いに役立ったことは言うまでもありません。　最後に講演の録音をもとに活字化の作業をお引き受け頂いた藤川文子氏にお礼申しあげます。(内藤)

■今年の「公民館まつり」の展示は、「江の島に三重塔があったのをご存じでしたか」として、浮世絵や昔の絵地図に記載された三重塔の姿を展覧した。ある史事を知ったら「本当にそうだろうか？」と、まず「疑う事」から始めるのが大切である。文書で残されたものも大切だが信憑性に欠けるのだ。遺跡のように具体的な形で残されたものの説得力はその比ではない。しかも、多数の事例があるとき、それは疑いのないものになる。今回のように数十点の絵や図によって「江の島三重塔の実在」を周知させた意義は大きい。(T.0)

■今号に折り込みの札所地図は、会誌 100 号掲載のものを分かり易くしたもので鵠沼資料展示室からの提供です。　この 117 号は平成最後の会誌となり、118 号は新しい元号での発行となるわけです。これで会誌『鵠沼』は昭和･平成・新元号と 3 世代に亘ることになり、改めて会誌作成に携わってこられた諸先輩方の弛まぬ努力と叡智に感謝します。平成最後の号を圭室文雄先生の歴史講座特集で締めくくることができたことを歓び、先生に厚くお礼申しあげます。(有田)

『鵠沼』　第 117 号
平成 30 年 12 月 20 日発行

本誌の記事引用の際は
ご連絡ください

編集･発行　鵠沼を語る会
藤沢市鵠沼海岸 2-10-34
鵠沼公民館内
電話 0466-33-2002

URL　http://kugenuma.sakura.ne.jp/